

339
216



0045869-000

特235-623

体験と信念に基づく郷土教育の学
習と実践

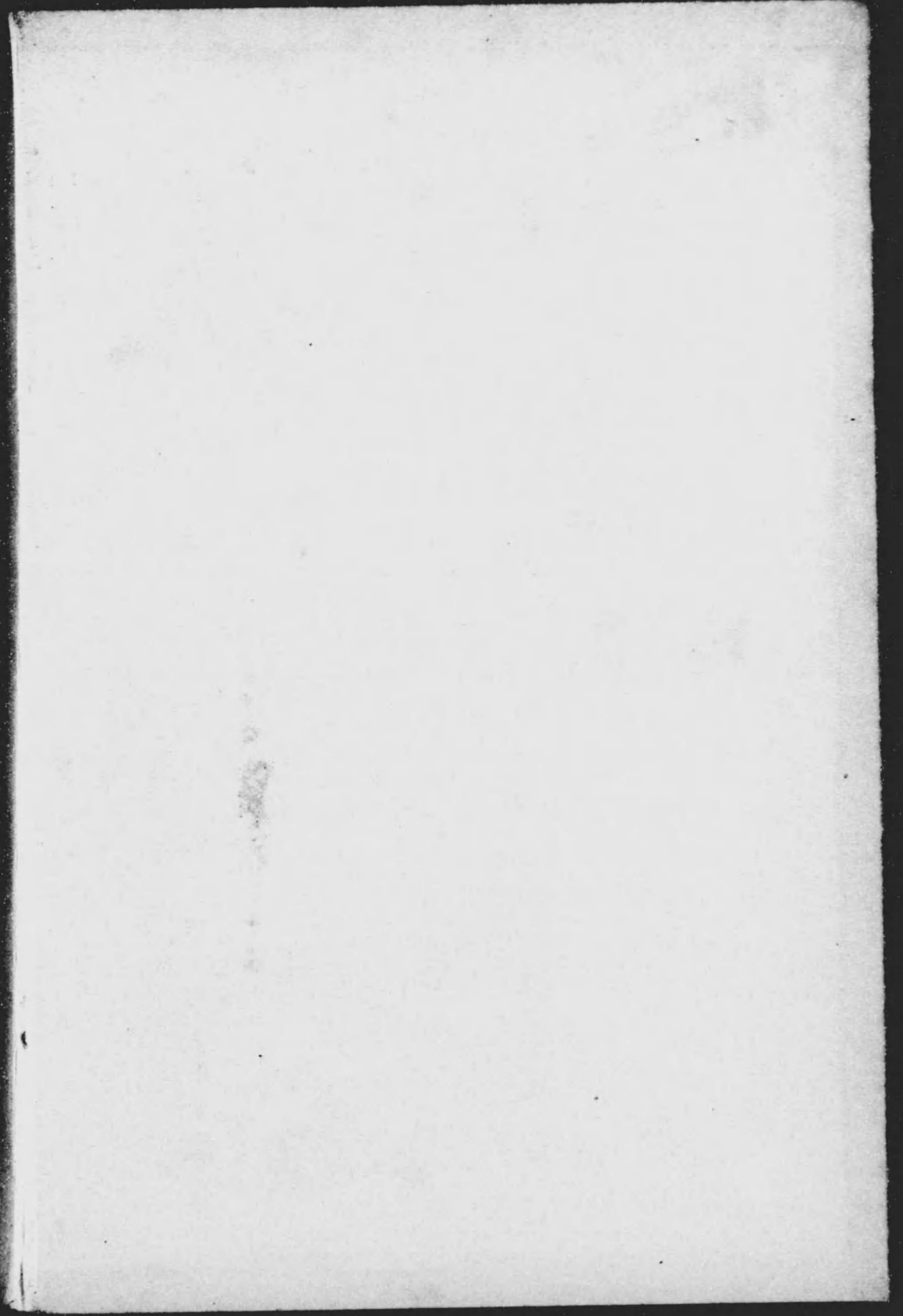
滋賀県島小学校・編集

明治図書

昭和6

AHF

013



特235
623

滋賀縣島小學校編纂



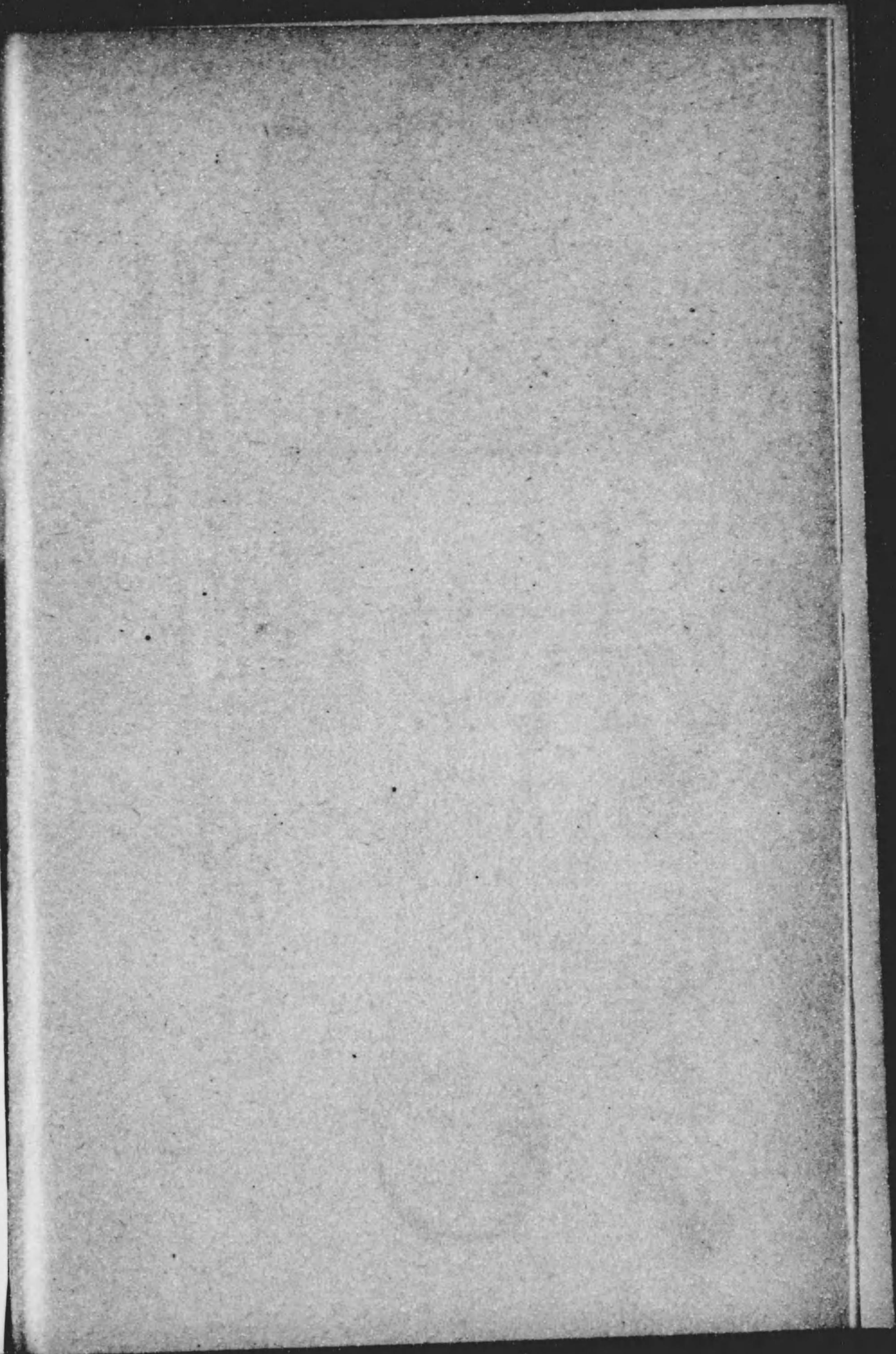
郷土教育の學習と實踐



東京明治圖書株式會社

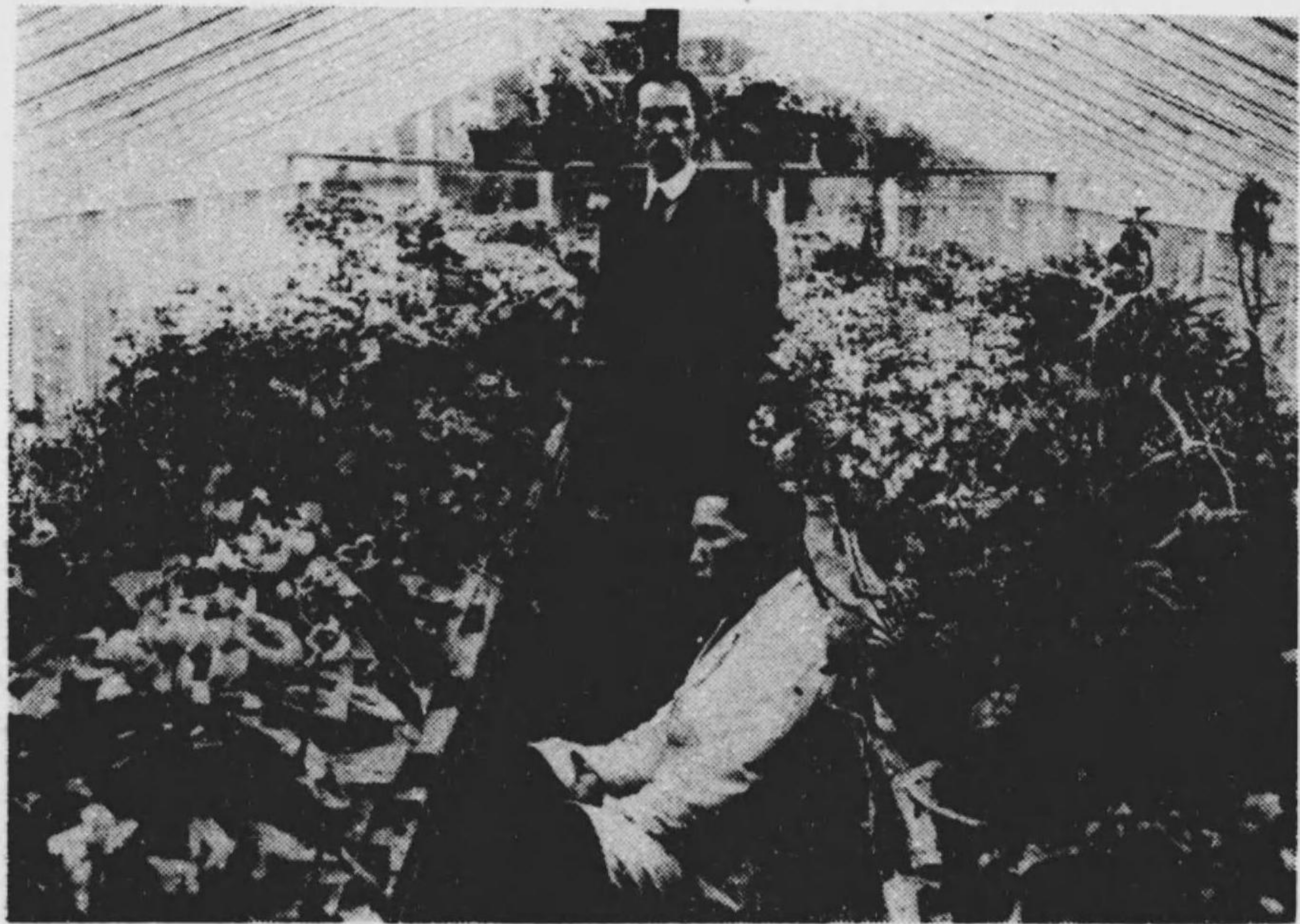


島尋常高等小學校





メロンの香り



あの日温室



(一の其) てね尋を頂山の那綺媛



(二の其) てね尋を頂山の那綺媛



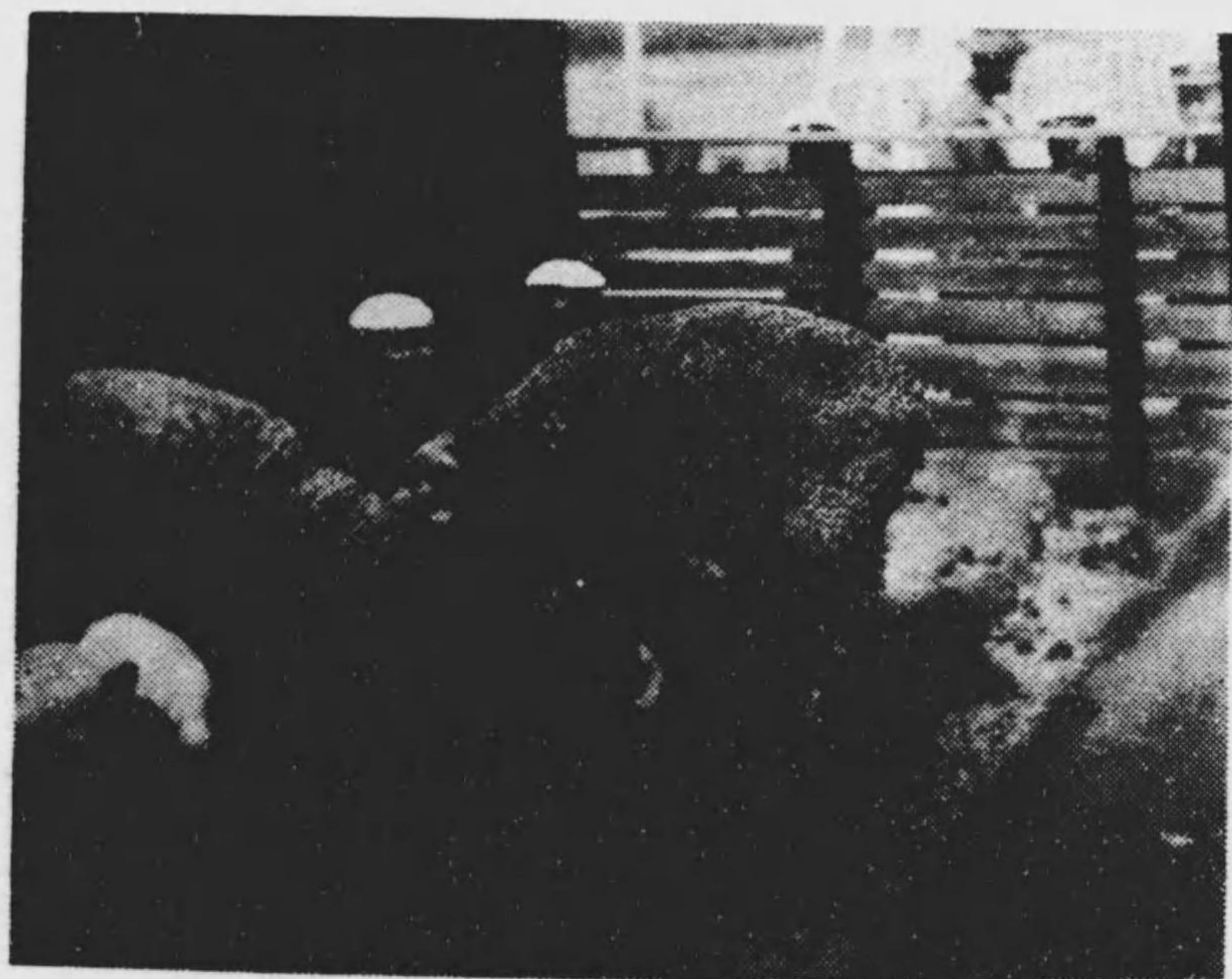
ろこく咲のプツリーユチ



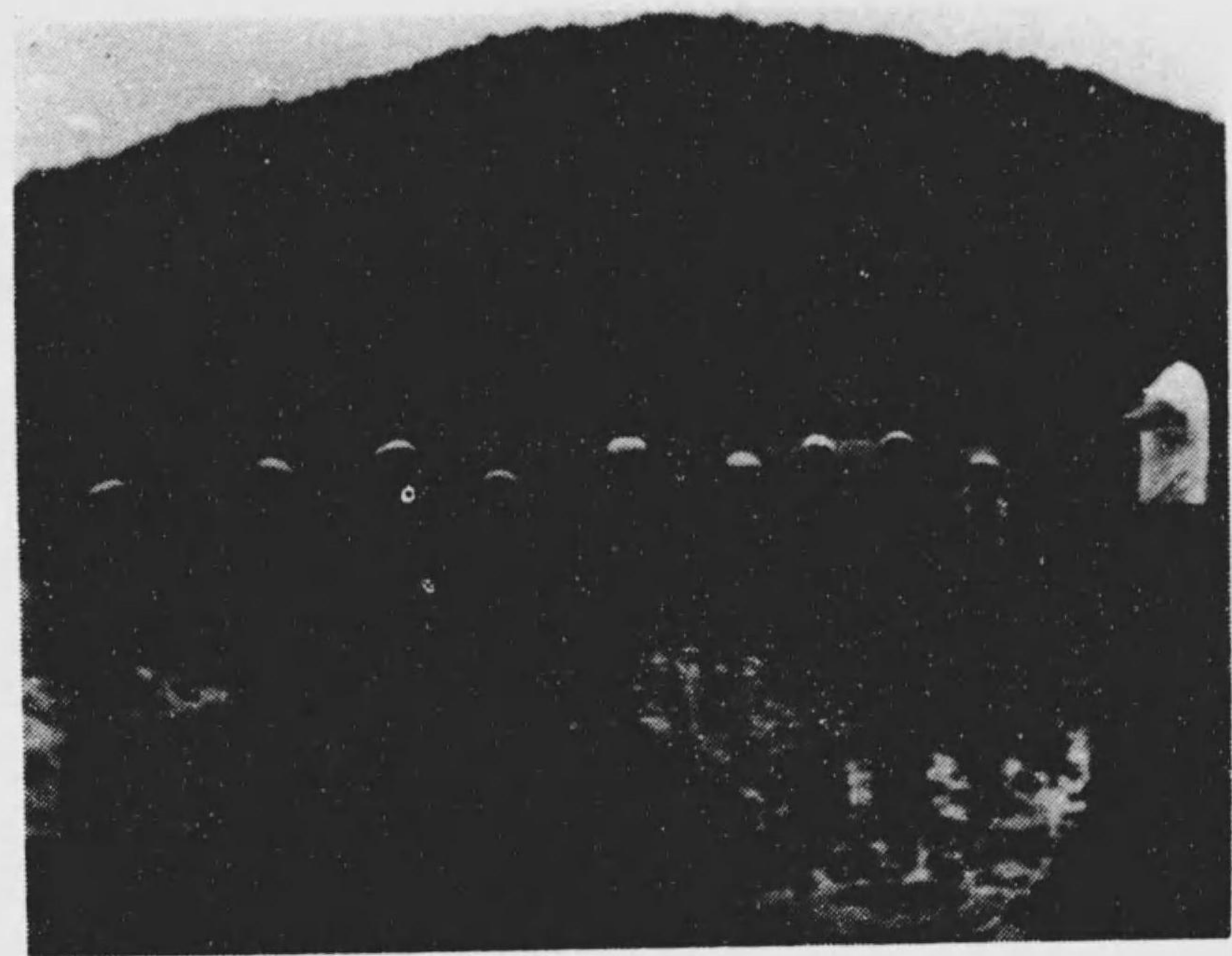
習 實 事 家



兔いい愛可



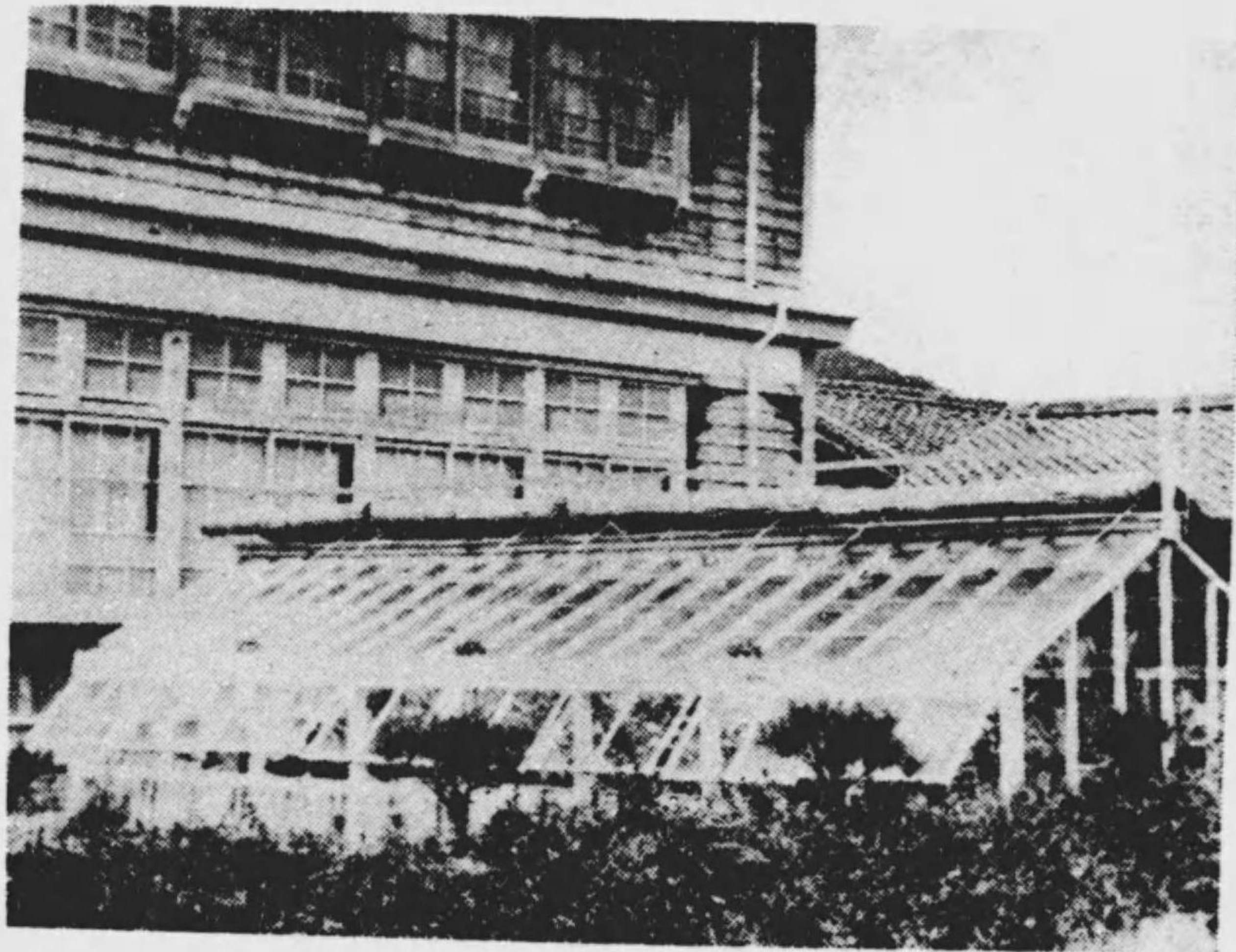
豚・羊緬いし和温



(一のそ) 達童兒むし親に土



(二のそ) 達童兒むし親に土



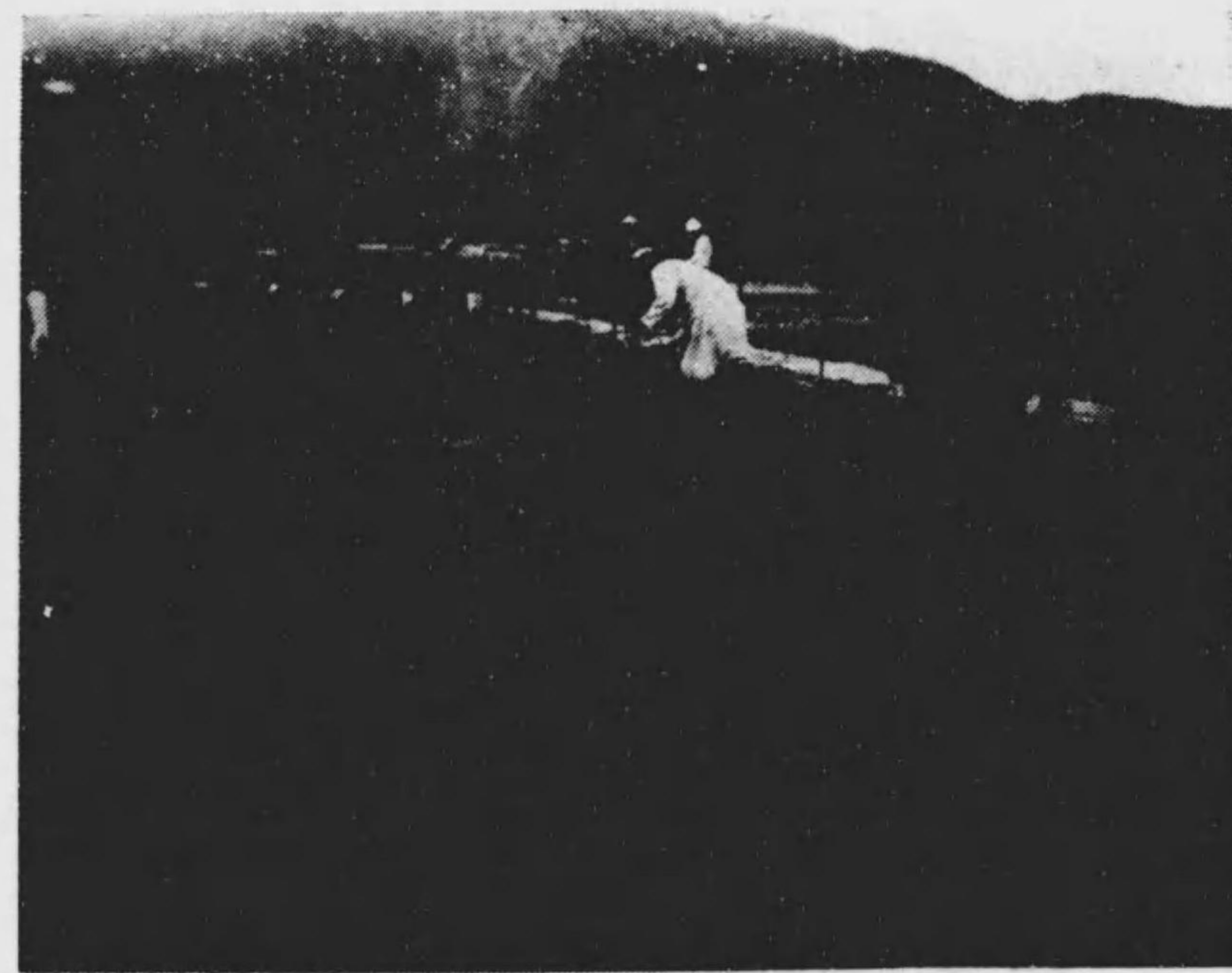
室 温



杯 一 精 ・ 杯 一 力



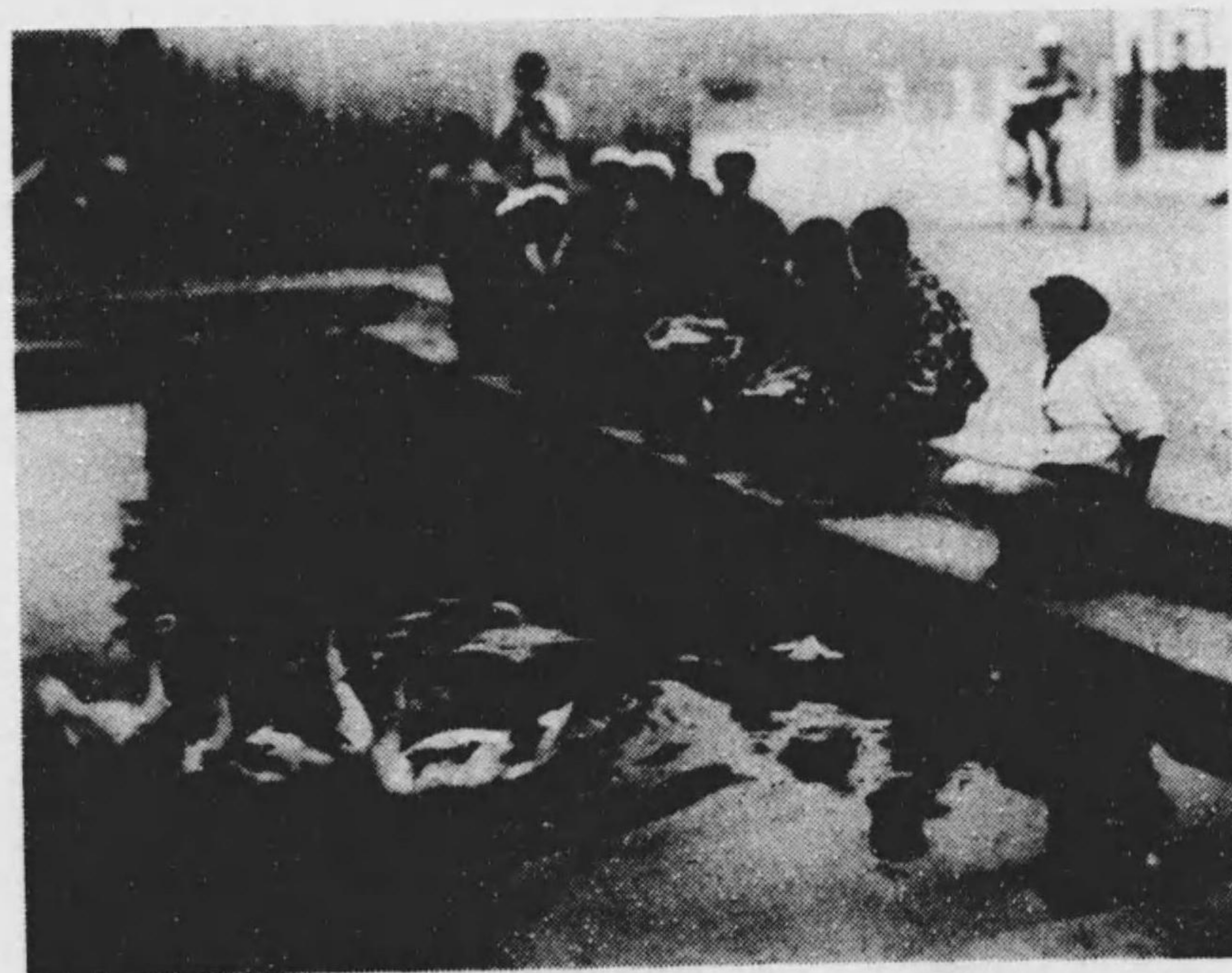
習 實 毛 剪



人 同 む し 親 に 土



鶏の群



鴨の群

序

日本の教育が、長く借物であり、従つて日本の土地に生えたものでなかつたことは、今日の教育界は勿論、一般社會が十分に知悉するところである。

然もこれが對策の最も根本的な着眼として、所謂郷土教育の提唱が忽ち全教育界を風靡した。

さうかと思ふと、郷土教育に関する意見が雨後の筍の如く發表せられ、それが又忽ち清算せよなどと云はれて居る有様である。

折角の最もいいこの着眼も、かうなつて又々一時の流行に終る

かと思ふと、我が國教育界の風潮の輕躁にもあきれざるを得ない。然るに、流石に、かうした教育界の中にも、種々の問題に就いて、多くの敬意を拂ふべき研究と實驗とがあるやうに、この郷土教育に就いても、島小學校では、全く我等を驚かすほど、着實な覺悟と努力とで、世間で、この郷土教育の聲だになき時に、騒がず、急がず、これを教育の本道と目指して進行して來たことは、何と云ふ心強いことであらう。

この事實一つが、第一に日本の教育界を誠めるに十分な雄辯である。

次に本書の生みの親たる島小學校は、その全職員を擧げて、唯

この一路に邁進したことは、これ亦何と云ふ珍しい例であらう。徒に聲を大にして叫んでたり、然も互に力の抵觸するやうな焦燥的活動を頗る多く見る時代に、島小學校のこの事實は、全く我等に頭を下げしめる慨がある。

第三、この全的努力の結晶たる「経験と信念に基づく郷土教育の學習と實踐」を見れば、所謂郷土教育が取扱ふべき問題は、悉く實際の経験、而もその根底に理論を藏した経験の上で解決せられて居る。何等他人の理論や言葉を徒に借り來る必要を見ない。

かくして、第四、この書は、最近俄に起つた郷土教育問題の理論的解決の最も頼母しき暗示となり、この問題の實際的施設の最

も親切な手本となることが出来た。

なべての著作が、とかく頭の中の作品であり、机上の議論で終つて居る時に、本書の如き底力あるものを滿天下に紹介することは、私の何よりも愉快とするところである。

希くは、島小學校の全員諸君が、日本の教育界から、今日廣い注意を自分の學校に向けられて居ることに心を亂さず、唯々、その初一心を貫くやうにありたいと祈る次第である。

昭和六年八月

佐々木 秀一

序

近時郷土教育の聲が高まり之が著述も續々公にせられつゝあることは教育上喜ばしき現象と言はねばならぬ。併し翻つて其の傾向を見るに多くは理論的であるか又は翻譯的であるか、實際的體驗を披瀝したものは比較的尠いやうに思はれる。然るに島小學校が「體驗と信念に基く郷土教育の學習と實踐」なる一書を刊行されることになり余に序文を求めて來られた、余は該書の内容は未だ見ないが該校の實際施設については親しく視察をして居るために此の著が眞面目な實際的研究であると信じ教育實際家の好參考にならうと思ふ。

同校長神田君は五年前に該校に來任し爾來明徹な頭腦と非凡の努力とを以て刻苦經營其の結果縣下稀なる僻村小學校が一躍して今日

では縣下は言ふに及ばず全國に名をなすに至つたのである。
同校の學校經營は新時代の流行に棹さしたのでは決してない、眞の教育は子供の生活から陶冶財を求めそれを體得せしむべきであるとの固い信念を以て郷土の教育化に黙々として精進しつゝあつたのに偶々今日の一新思潮たる郷土教育の聲と合致したのである。
それ故説く所必ずや肯綮に當り所謂教育的示唆を以て讀者に迫るであらうと思はれる。

本書は教育實際家にとつて慥かに裨益することを信じ茲に一言所感を陳べて世に之が一讀を推薦める所以である。

昭和六年八月

滋賀縣視學

川 隅 信 三

序

島小學校が郷土教育の一模範校として世の視聽を集めるやうになつたのは、極く最近の事である。併しその餘程以前から、農村の小學校として、農村に即した教育方針を採り、特に補習學校の教育並に本校實業科の經營に力を入れて、縣下では取り別け評判がよい學校であつた。然るに、昨年の秋、時恰も文部省が郷土研究を獎勵せんが爲めに全國各師範學校にその施設に關する費用を下附するに至つて、俄かに郷土教育熱が一般に勃興したが、本校の校長並に職員の協力によつて研究され編纂されつゝあつた「島村郷土讀本」が漸く完成公刊され、同時にその副産物として設置せられた郷土資料室も出來上つた爲めに、端なくも社會は本校を以て、郷土教育の先驅者の如く稱揚する事になつたの

である。

爾來、社會一般に教育革新の機運と合流して新しい郷土教育の流行は、忽ち全國を風靡し、郷土教育を知らなければ教育者でないと言へ考へられる有様となつたので、風を望み、名を聞いて本校に來り見るもの一時は北海道、臺灣をも遠しとせぬ程の賑はひであつたといふ。とは云へ、本校は別に、「郷土教育」の流行を追つて事新らしい方針を採用して居たのではなく、郷土生活に即する教育は、農村の一小學校として當然の事だと思つて居なかつたから、理論上、何を勞作教育と云ひ、公民教育と云ひ、又は郷土教育と云ふのか、自からの教育方針を人に説明する事を寧ろ迷惑に感じて居た位であつた。

抑も、この島村の地たる、山紫水明を誇り、古今の史蹟に富むとは云へ必ずしも、經濟的に裕福だとは云へない。否、寧ろ、湖國の一僻村として、

將來に向つて大いに開拓の必要に迫られて居る郷土に他ならない。即ち、學校の教育を郷土化すると云ふよりも、却つて、郷土そのものを教育化しなければならぬと云ふ自覺が、校長始め職員の間、早くから起つて居たのであつた。

茲に於て、本校は、徒らに郷土教育の聲譽を高め行く傾向に慊らず思ひ、流行に巻き込まれず、只管、初一念に向つて、勇往邁進しなければならなかつた。この間に於ける、校長神田氏の苦心も一通りではなかつたてあらうが、また職員の間も涙ぐましき程であつたに違ひない。私は、かうした本校の團結心こそ、郷土教育の眞諦であり、なまじ百萬言の新教育理論や裝飾的な施設の中などには容易に期待し得ない何ものかと宿つて居ると感ずる一人である。栗下君のやうな新任の若い訓導が、あれ丈け心身を打ち込んで自由に手腕を振ふ事が出來たのも全

くこの學校全體に包まれて居る尊い雰囲気は然らしめて居るのだ。郷土教育を人はその生活環境に即した教育だと云ふけれども、學校そのもの、裡に作りなされる生活環境こそ、何よりも大切なものであると云ふ生きた證據を、我々はこの學校に見出したのである。

「新しい村を建設せんが爲めに、先づ村を研究し調査し、かくして將來の島村の爲めに兒童青年及び村民に呼びかけ、且つ指導しやう。學校は村の農事試験場でもあり、研究所でもあり、また博物館でもあるべきである。」かう云つた信條は、期せずして全校職員は勿論、頑是なき生徒並びにその村の人々の間にも、知らず識らず傳はり交はし、今や、校庭には、綿羊や家鴨や兎や鶏の小屋が作られ、立派な温室も出來、更に校外には、農會と連絡して民衆講座や産業組合の仕事が手を村の實際生活と結んで居る。

かくて、本校が、多年教育の實際化を企て、眞に農村の一小學校としての義務を果したいと云ふ目的の一部は、漸くその實踐の域に入つたと申すべきであるが、かの「郷土研究」だの「郷土調査」だの「各科の郷土化」だのと云ふ仕事に至つては、本校にとつては、單に、その計畫を實踐に移す爲めの手段に過ぎないのであつて、所謂「郷土教育」の爲めの「郷土研究」でも、「郷土化」でも何んでもない。それは謂はゞ末節に過ぎない。若し、人が、本校に來つて流行の郷土教育的模範を探さうとしても、恐らくその郷土讀本や郷土資料室などの中には見出し得ないであらう。而も今尙ほ、引き續き本校に訪れ來る各地方の參觀人又は視察員は、何かしら、會得し了解し模倣し得べき手が、りを求めて止まない。之れに向つて校長始め全職員が代る代る應接し説明するが如きは、或る意味で有難迷惑にもなる位であらう。

この時に當つて、出版書肆の求め否み難きまゝに、昨秋以來、實地教授の經驗を積み、教育實踐の工夫を重ねた本校の實際を総合的に輯録し一書としてその公刊を決心された事は頗る時宜に適した處置であつて、一つには、郷土教育流行に對する他山の石ともなり、また一つには本校の計畫が、こゝに達した一道標としての記念ともなるであらう。

恐らく、歐米の新教育論を引き合ひに出せば、本書以上に無数の郷土教育原理が附け足されるに極つて居る、また資料の不足を補ひ、方法の不備を完うしやうとすれば、本書の如き小冊子では到底期待出來まい。この新著が、他の數多き本校編纂の印刷物と共に相俟つて、更に一層、現代の教育界に役立たんが爲めには、今後に引き續く永い努力が必要であらう。

とは云へ、本書の編纂に當つて、校長並に職員諸氏が、文字通り不眠不

休、幾多の犠牲を拂つて、これ丈の纏つた郷土教育書を大成する事が出來たのも全く、世の郷土教育思潮に追從せず、早くからこの土地に即した教育に心がけて居た尊い收穫であり果實である。否、本書は、實にこの島村のみの收穫であり、成果であると云ふべきではあるまいか。従つて、之れをどこの郷土の教育にも當て嵌めやうとしたり、或は全國一般の參考書に擬したりするものがあつたとしたら、それこそ、この書の有つ意義を没却して仕舞ふであらう事を恐れる。何となれば、かく普遍性を期待すればする程、益々郷土教育の眞諦から遠ざかつて行くであらうから。

而も私は、今や一島村の教育が、やがて滋賀縣の教育と結び、滋賀縣の教育が、更に日本の教育に連なるべき偉大なる時代の展開を信ずる限り、に於て、本書を通じて想ひ起す島小學校の全風貌に對し、無限の懐か

しさと喜びとを禁じ得ないものである事を茲に附記したい。

昭和六年八月

郷土教育聯盟理事

尾 高 豊 作

自 序

私達は、學理的にも、實際的にも餘りに貧弱な者の集りであります。併しながら私達は、少なくとも、この村の教育者と限定せられたら、恐らく誰にも劣らないと言ふ信念をもつてゐます。

この信念によつて、私達は村に即した教育を行つてゐます。即ちこの村を對象として思索し、體驗し、やがてそれが私達の教育となるのであります。

この村に即した教育が、故意か、偶然か、時代のしからしめた所か、はからずも郷土教育なる言葉をもつて呼ばれ、先輩諸兄、あるひは未知の同志の方々から過分の激賞にあづかり、雑誌、新聞、その他から御推賞をうけ、わざわざ北は秋田、南は臺灣の地から參觀にこられると言ふ有様であります。

私達の歩みきたつた幾星霜かを考へて見るとき、苦悶と焦慮に迷ひつゝ、自己の心に鞭うちながら、精進して來た過ぎ去りし日の歩みの、誤りでなかつたことを喜ぶものであります。

今、その貧弱ながらも、永かつた幾星霜かの歩みの跡を公にして、滿天下の同志の御高評を仰ぎ、もつて今後の私達のよりよき指針とし、眞の教育の王土をめざしたいのであります。

あるひは、私達の論旨は、非學理的であるかも知れませんが、論理的でないかも知れません。然しとにかく私達は思索し、そして行ひます。

私達は勿論、理論をも尊重はしますが、それよりも、より實際的であることを希求するものであります。

本書は、私達の過去の苦難の跡の一部分であり、しかも未完成のそしりをまぬがれ得ないでせう。けれども私達は、永遠に未完成の姿であると思ひます。そして、その未完成さに満足しきれず、完成の姿を求めて行く、苦難の行者——それこそ、まさしく私達の姿なのであります。かく言つてゐる間にさへも、時々刻々と、郷土も、國も世界も變轉しつゝあります。

尙最期に、常に私達に、心から御鞭撻を蒙つてゐる先輩諸兄、殊に川隅信三氏、尾高豊作氏、大西伍一氏、千葉春雄氏、尾田鶴二郎氏並びに藤原惣太郎氏の御厚意を感謝

する次第であります。

昭和六年七月

滋賀縣蒲生郡島小學校

郷土研究部同人

責任者 神 田 次 郎

長谷川元太郎 宮田 隆 圓

稲本彌三郎 杉本 勢 造

草野 太八 小川 信 一

廣瀬 ふさ 岡田 せい

細川 幸子 笹木 すすを

責任者 栗 下 喜 久 治 郎

體驗と信念に基く郷土教育の學習と實踐

目次

第一編 郷土教育

- 一、人生と郷土……………一
- 二、郷土と其の範圍……………四
 - (一)教育上の郷土……………四
 - (二)郷土の範圍……………六
- 三、郷土教育……………八

第二篇 郷土研究

郷土教育の學習と實踐 目次

一、郷土研究の目的 二

二、郷土研究の分類 三

三、郷土研究の方法 一五

 (一) 戸別調査の方法とその注意 一五

 (二) 文献によるもの、方法とその注意 二〇

 (三) 口碑傳説によるもの、方法とその注意 二〇

四、郷土研究項目の實際 二二

 (一) 修身科郷土研究項目の實際 二二

 (二) 讀方科郷土研究項目の實際 二九

 (三) 綴方科郷土研究項目の實際 三三

 (四) 書方科郷土研究項目の實際 三五

 (五) 算術科郷土研究項目の實際 三五

 (六) 國史科郷土研究項目の實際 三六

 (七) 地理科郷土研究項目の實際 四三

 (八) 理科科郷土研究項目の實際 四四

 (九) 手工科郷土研究項目の實際 五九

 (十) 圖畫科郷土研究項目の實際 六〇

 (十一) 唱歌科郷土研究項目の實際 六〇

 (十二) 體操科郷土研究項目の實際 六二

 (十三) 裁縫科郷土研究項目の實際 六三

 (十四) 農業科郷土研究項目の實際 六三

 (十五) 家事科郷土研究項目の實際 六八

第三編 各教科郷土化の實際

 (一) 修身科郷土化の實際 八

 (二) 讀方科郷土化の實際 九二

 (三) 綴方科郷土化の實際 九六

 (四) 算術科郷土化の實際 一〇三

郷土教育の學習と實踐 目次

(五) 國史科郷土化の實際……………一九

(六) 地理科郷土化の實際……………二二

(七) 理科科郷土化の實際……………二四

(八) 圖畫科郷土化の實際……………二六

(九) 手工科郷土化の實際……………二七

(十) 唱歌科郷土化の實際……………二八

(十一) 裁縫科郷土化の實際……………二九

(十二) 農業科郷土化の實際……………三〇

(十三) 家事科郷土化の實際……………三〇

第四編 實踐による郷土の教育化

一、郷土の教育化……………一〇四

二、實行の闘士たれ……………一〇六

三、郷土の教育化の實際……………一〇八

(一) 本校の農業科施設……………一〇七

(二) 村の農事試験場化したる本校農業科施設……………一〇九

(三) 郷土の教育化のための民衆講座……………一一四

(四) かくして村の産業は、自治は革新されんとす……………一二七

(五) よりよき郷土開發のために……………一二八

第五編 郷土讀本の編纂とその取扱方法の實際

一、郷土讀本編纂要旨……………一二九

二、郷土讀本の内容……………一三〇

三、郷土讀本の實際……………一三三

四、郷土讀本の取扱方法の實際……………一三〇

(一) 各教科郷土化の場合……………一九〇

(二) 兒童の自由研究の場合……………一九八

第六編 郷土資料室經營の實際

一、郷土資料室經營要旨	三〇三
二、郷土資料室蒐集資料	三〇四
(一)資料	三〇四
(イ)理科的の資料	三〇四
(ロ)農業科的の資料	三〇八
(ハ)算術科的の資料	三一一
(ニ)地理科的の資料	三一一
(ホ)歴史科的の資料	三一一
(1)古文書類	三一一
(2)古書類	三二六
(3)衣類住類	三三一
(二)圖表	三三三

(1)修身科的圖表	三三六
(2)讀方科的圖表	三三六
(3)綴方科的圖表	三三八
(4)算術科的圖表	三三八
(5)歴史科的圖表	三三九
(6)地理科的圖表	三三九
(7)理科的圖表	三四〇
(8)唱歌科的圖表	三四〇
(9)體操科的圖表	三四〇
(10)農業科的圖表	三四〇
(11)家事科的圖表	三四一
(12)裁縫科的圖表	三四一
三、郷土資料室資料の活用の實際	三四二
(一)各教科郷土化の場合の資料として	三四二

——(目次終り)——

體驗と信念に基く郷土教育の學習と實踐

體驗と信念に基く郷土教育の學習と實踐

滋賀縣島小學校編纂

第一編 郷土教育

一、郷土と人生

かにかくに澁谷村は

なつかしき

思ひ出の山、思ひ出の川。

(石川啄木)

若き天才歌人啄木をして、餘りにも名高いこのふるさとの歌を詠ましめた澁谷村。

一、郷土と人生

一

建國以來培はれてきた大和魂のつゞく限り、この慕郷の歌も永遠に人々の間に口ずさまれることであらう。

まこと、草深い山村を郷土とするものも、あるひは又、ローマンスカアの走り行く華かな、都會を郷土にもつ人も、一度郷土を後にして、異郷にあるとき、絶えず走馬燈の様に、今少しく現代的に言ひかへるならば、ジャズの奏樂の様に、彼等の惱裡を往來するもの——それこそ郷土の姿ではなかつたのか。啄木は、彼等のもつ言ひ知れない哀愁、慕郷の心を三十一文字の中に寸分もなく唄ひつくしてゐる。

彼の阿倍ノ仲麿をして、懐郷の念をおこさしめたのも、郷土日本の然らしめしところ。

然しながら、郷土なつかしと言ひ、懐郷の情と言ふも、たま／＼郷關を出て、大成せし一偉人、一詩人にのみ存在する感情なのか。

然らず。すべての人々の間にかもされる人間本然の實相であり、餘りに深く明瞭にささみこまれたる感情である。

人によれば、あるひは言ふてあらう。郷土に生活するものにとつて、果して人生と

郷土と、幾何の關係があるかと。

知らずや、慈愛深い郷土の懷に抱かれてゐる間の永い體驗生活を。それこそ、とりもなほさず、知らず／＼の裡に、完全なる郷土人へと運ばせる所以のものである。

郷土ニハ、全地球ヲ學ブニ必要ナル、スベテノモノガアル。

カール・リツテルは、かく言つてゐるが、實に郷土によつて、黙々の中に、精神も身體も郷土化され、完全なる社會人へと發展する。

郷土を除いて、果して眞の日本人は、眞の大和魂は、何處に於てつくられるか。

あるときは野心奮勃として郷關を後にした若者が、世相にむくはれず、つひに空しくも、悄然と失望になげきつゝ、故郷の土を踏みしめしとき、心ゆくまでなぐさめ、今一度と強い奮勵心をよびおこしめるものは、郷土の心からの聲である。

郷土の山川草木は勿論、路傍に轉がる石ころにさへも、郷土の人々には印象深い。

然るに近時心靈の故郷を忘却して、瞬間的なる享樂を追ひ、すべてに尖端的になり果てし結果はどうだ。經濟國難、思想國難の因をなし、識者をして、「郷土に歸れ」「今一度祖國をみつめよ。」と生々しく、傷々しいまでに、大きく時代の聲として叫ば

せねばならないではないか。

さればと言つて、せまい「吾國自慢」を稱讃するものでもない。

郷土に愛着し、郷土を死守することは、一面たしかに美風ではあるが、亦その缺陷でもある。

汝ヲ貴イ。祖國ニ結ビツケヨ。

汝ノ全身ヲ以テ堅ク祖國ヲ支ヘヨ。

祖國ニハ汝ノ力強イ根源ガアル。

シラーをして、かく叫ばしめた如く、混亂の極に達したかと思はれる現時の世相を更新し、行きつまれる我が祖國をして、二千有餘年の光輝を發揚せしめんがために、今一度郷土を凝視せねばならない。

二、郷土とその範圍

(一) 教育上の郷土

郷土の範圍を限定するに先立つて、「教育上では如何なる郷土を以て、所謂郷土と爲

すか。」と言ふ事を定める必要があると思ふ。

現代教育上では郷土を二様に解釋してゐる。

(1) 客觀的解釋 郷土とは、主として空間的の場所を意味するものであつて、即ち兒童の生れた地方であり、兒童の直接に往復し、接觸し、直觀することを得る視界内の周境を要素とするものであり、勿論その中には人類社會を包有しない譯ではないが、主として自然を指したものである。

(2) 主觀的解釋 郷土とは主として、一定の領域内に住する人類の團體及びその傳説や、歴史等を指すもので、土地や自然的要素を除去した人的方面をいふのである。

以上の如く解釋の異なるに従つて、郷土に関する教育上の見解は、二様に分れるのである。

(1) 方法觀の上に立つ者は、凡べての教授は、郷土の材料と連絡せしめなければならぬといふ所謂郷土主義説と、

(2) 目的觀に立脚するものは、この郷土によつて教育せんとする主情主義説とである。

以上二説の決定は甚だ困難であるけれども、元來郷土が吾人にとつて、眞に郷土といふ價値あらしめるものは、主として其の科學的認識によるものであつて、主觀的解釋、

客観的解釋と區別すべきものではない。

チーリツヒが、

「郷土とは、野に非ず、森に非ず、山に非ず、川に非ず、空気に非ずして實にそれらよりも大きなものである。吾人幼時の回想の結合する所、神聖な感情のつながる所である。

要するに、無数の強固な連絡によつて、決して吾人から斷絶することを得ざる場所である。」

即ち、前述の二者は、密接不離の關係をもつもので、教育上の郷土としては、この二者を折衷した所謂、超客観的、超主観的解釋によらねばならぬ。言ひかへれば、方法觀と目的觀との混融一如の見解に立脚した新郷土主義に依らなければならぬ。

この境地に立つて眺めた郷土が即ち眞の教育上の郷土であると思ふ。

(二) 郷土の範圍

郷土なる言葉の觀念は極めて曖昧なものであつて、一般に用ひられてゐる郷土と言ふ言葉の意味は、その用ふる場合と、用ふる人の立場によつて解釋を異にしてゐる。即ち一郡から見れば、村は郷土となり、一縣、一國よりすれば、郡、縣、更に廣く世界

より眺めた時は一國が即ち郷土となる。

今郷土の範圍について、大體次のやうな諸説がある。

- (1) 兒童の所屬する學區を郷土となす説。
- (2) 自己所屬の法制的區劃即ち府、縣、郡市町村を以て郷土となす説。
- (3) 學校を中心として半徑八杆の圓周中に包括された範圍となす説。
- (4) 學校を中心として兒童が、一日中に往復し得る地域となす説。
- (5) 歴史的に見て、舊藩領を郷土となす説。

以上諸種の説があるが、本校では郷土を次の如く觀てゐる。

法制上の區劃である我が村を以て、其の範圍と定む。換言すれば、兒童の直接觀察する事象の存する生活環境の領域と言つてもよいのである。更に進んで、最も關係の深い附近の土地即ち兒童に直接關係を及ぼし得る範圍内の土地を加へ、漸次擴大して郡、縣、更に進んでは、國家、全宇宙の領域となり、生命の發展と共に、郷土の範圍も進展すべきものである。

三、郷土教育論考

近時郷土教育が、喧しく、全國津々浦々に時代の聲として叫ばれるのを見ると、迷へる教育界をして落つくべき所に落つかせたいと思ふ一面、今後の郷土教育の前途の洋々として、その多幸を思はせると同時に、文字の上の、理論上の競争的な郷土教育のみが、にぎはつてゐはしないかと考へ反省せざるを得ないのである。

今や郷土教育は、單なる理論の時代ではなくして實施の時代であることを痛感し、今こそ岐路にある郷土教育をして正しき道を歩ませたいと希ふのである。

郷土教育は、もとよりある一派の反駁するが如き、單なる狭い郷土に立こもり、偉人や古蹟を教へ、お國自慢を獎勵するものではない。

然らば郷土教育とは如何。我々は答ふ。よりよき日本人たらしめ、よりよき世界人たらしめんがために、自己の生活環境たる郷土を、正しく、新しく、全體的に認識せしめ、ひいては全日本、全世界を認識せしめ、現在の生活をよりよくすると言ふ思想と感情を育成させるのである。即ち、それは、郷土に即した教育となり、郷土に依る

教育となり、郷土への教育となるのである。

然らば、職業指導は一見、郷土教育に反するが如く考へられるが、全く郷土教育に包含せられるのである。かく言へば、教育即郷土教育であり、教育はそうてなければならぬはずではないか。

かゝる故に、郷土教育は一村の教育であり、一町の教育であり、かつ又教育はそうてなければならぬはずだ。

即ち郷土教育は一村の教育であり、一町の教育であり、一國の教育であつて、決して従來の如き學校教育の一新設科目であつてはならないはずだ。何故ならば、それは理論上では勿論、實際上から考へても、現行法規によつて、新設出来るや否やは餘りに明瞭なるものであるが故に、教師と児童が一體となつて、地方地方の實體を科學的に研究し、各教科を郷土化し、あるひは、それによつて、郷土讀本を編纂し、郷土資料室を經營することが必要である。

郷土に即した教育、郷土に依る教育、郷土への教育——それこそ、まさしく、我々の言ふ郷土教育であり、國家の要求せる教育である。

かくするときは、ひいては、その村、町、市の開發と改善を誘導し、新天地の開拓ともなり得るのである。

教育の目的が永遠なると同時に、又郷土教育も永遠性を伴はねばならぬ。

第二編 郷土研究

一、郷土研究の目的

口に、郷土教育を幾ら力説して見た所で、あるひは、又理論上如何に郷土教育の價値を知つた所で、それは單にその人の智識としてのみであつて、實施せられるべきものではない。

郷土教育實施の難點は、實にそこにある。なぜならば、郷土教育は、郷土研究により、生きた複雑なる郷土社會の機能を把握することによつて、初めて可能であつて、決して机上の論でなし得られるものではない。我々の言ふ郷土研究は、常態的な郷土を科學的に研究し、全體と比較し外へ連がせるところに意義があるのであつて、研究項目によつて研究し、それを常に日本全體又は世界の趨勢と言つた廣い環境と連絡するところに價値がある。

即ち、せまい距離区域内の事象としてではなく、どこまでも全體の一部分としての郷土研究をなすことが必要であり、郷土研究と言ふも、決して郷土の内に限ると言ふ意味のものではなく、異常の郷土の研究であつてもならない。

又我々の研究は、一部所謂、郷土研究家のなすが如き、道樂てやるのではない。郷土研究と言ふも、それは畢竟、教育の立場からである。教育の手段としてあることを忘却してはならぬと共に、郷土研究が、研究のための研究であつてもならないことは言を待たない。

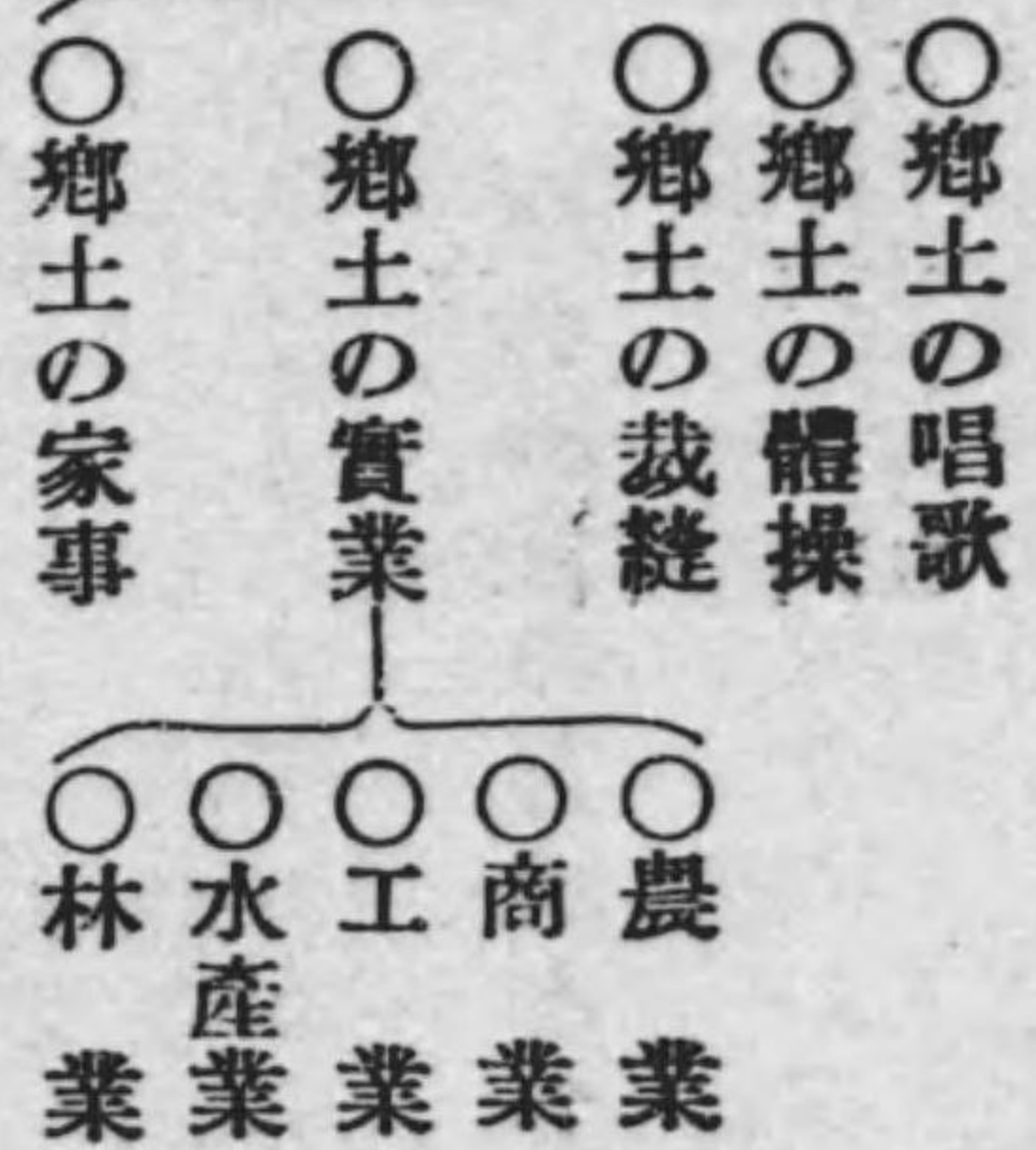
二、郷土研究の分類

郷土研究の方法に入るまでに、如何に分類して郷土研究を行ふかをのべるのが順序のやうである。

人によれば、あるひは分類など不必要だと言ふ人もあながちないとは言へまい。併し、唯一人の、個人の研究なら、無計畫に、ざつくばらんにやつて行つてもいいだらうが、數人のものが、一緒になつて行ふには、系統的なプランを必要とするので

はなからうか。それならば如何に分類すべきか。分類法は人によつて、あるひは又場合によつて異なるだらうが、次の様に大別することが出来る。

- (イ)
 - 自然科方面
 - 郷土地理方面
 - 郷土歴史方面
 - 社会科方面
 - (ロ)
 - 社会調査
 - 民性調査
 - 經濟調査
 - (ハ)
 - 郷土の修身
 - 郷土の國語
 - 郷土の算術
 - 郷土の歴史
 - 郷土の地理
 - 郷土の理科
 - 郷土の圖書
 - 郷土の手工
- 小學校
に於け
る各教
科
- 讀方
○書方
○綴方



以上三項の中、(イ)(ロ)の方法によると折角苦心してつくりあげた郷土研究も、之を如何にして既成教科の全課程と連絡すべきかについて餘程の考慮を必要とし、研究のための研究にちいる弊を生じる。

(ハ)の方法の缺陷は、郷土研究項目の中、それを何れの教科により研究すべきかと言ふ缺陷もあるが、それは郷土研究をする前に、項目の配列を顧慮すれば、解決出来るのであるから、この意味から言つても、(ハ)の方法による郷土研究が小學校に於ては最も適當である様に思はれる。

三、郷土研究の方法

郷土研究の方法には色々あらだらう。専門的にやれば又それに應じた方法も生ずるであらうが、今迄私達の實際に行つた方法は、ほゞ次の様である。

- (一) 戸別調査
- (二) 實地踏査
- (三) 口碑傳説による研究
- (四) 文献による研究
- (五) 以上の概括的研究

みなそれ／＼に使命を有してゐるが故に、各項にわたり述べてみる。

(一) 戸別調査の方法とその注意

郷土研究の方法には、實地調査によるもの、口碑傳説によるもの、文献によるもの、戸別調査によるもの等種々あるが、其中戸別調査によるものは、事最も面倒である。

それは一部の不正確な調査の爲に全體として何等無價値なものとなる場合が多いからである。

先づ調査に先だつて、調査者自身が、それ／＼調査する事項、目的を明にし、且つ調査した結果を如何に活用するかに就いて詳細な研究をなし、而して調査の順序、段取に就いて深い研究、注意をしてプランを立てる必要がある。然らずして只漫然として之に着手したならば、折角の調査も徒勞に過ぎないものとなり、結果は何等役に立たないものとなる。

次に必要なことは、町村當局並びに町村民一般に調査する目的を、直接或は手紙、出来得るならば會合によつて徹底せしめ、充分な理解を得て、この調査に對しては町村民一般が心から應援してくれる様に了解を求めて置く事を忘れてはならぬ。一般の無理解な時は、豫期の確實な調査を遂げることは出来ない。

例へば今一家の生産額を調査せんとするに、理解なき人は、教育的の調査とは露しらず、一途に公課に關係あるものとして、調査に不正な數字を記入し、或は調査を拒否する舉に出づる様な事もなきにしもあらずである。こうなつては到底正確な調査は

望むことが出来ない。

次に調査の拒否する一例を述べよう。今借財しらべをせんとするに、多くの人は之を批難し、さらふものである。この様な秘密を要するものは、封書により、而も無名で記入してもらへば、公にならないから、調査は正確に異議なく進むものである。

愈々本論に入るが、調査せんとする謄寫物は、先づ調べんとする其の町村の實戸數よりも、三、四十戸分多くプリントして置く。

なぜならば家によつては、失つたり、破つたりする家があるから、その爲の準備である。

又或る調査によつては、特別の家のみ調べればよい事がある。たとへば發動機の調査などがそれである。かゝる場合には發動機を所持してゐる家を大體しらべて、あまり多くならんやうに謄寫物を用意せばよい。

そこで謄寫物を見童の手によつて配布するのであるが、見童はよろこんで仕事をす。然し大ざつばなのは仕方がない。そこで相當訓練をする必要がある。

配布される見童は主として高等科生を用ひる。謄寫物を見童の手に渡す前に、見童

を大字別によつて区分し、各人によつて配布する家を定め、配布したものは、必ず責任をもつて蒐めることに定めて置く。配布する家を区分したら、それによつて配布の原簿を作製する。本校では次の様にしてゐる。

通 字 大	責任者
配 布 先	備 考
小計	

配布してから、蒐める期間は、調査物によつて、長短はあるが、三日あるひは四日位

にする。短かすぎても書けないし、長すぎると、家で失ふ慮れがある。

さて児童がこの調査物を蒐めて来たならば、それを一々原簿と照合して、未だ蒐ま
らない家があつたら、忘れぬ中に擔當の児童に理由を尋ね、家庭へ何度も請求する。

一度位で全部は中々集まらない。第一次、二次、三次と何回もかゝつて集めなけれ
ばならない。

今一つ調査の實際に當つて注意すべきは、調査される者、即ち町村民一般にとつて
は、調査の記入事項、方法などが分らない場合もあらうと思ふから、調査用紙には、
例示して委しく説明し、且つ配布する児童にはしつかりと教へて置いて、質問されて
も應ぜられるやうにして置く必要がある。

以上大體を述べたが要するに、調査者たる自身が調査の目的を明にして、結果を如
何に活用するかを考へて、町村當局並びに町村民一般の了解を得て、援助を受けて總
がかりて調査に當り、遺憾なく目的を達する様にすべきである。



(二) 文献による方法上の注意

文献による研究方法と言つても別にとりたて、述べることもないから、私達の郷土研究に参考にした文献をあげてみる。

- 滋賀縣人物史
- 日本山嶽史
- 近江興地誌
- 近江名木誌
- 日本魚介類圖誌
- 天氣圖の解剖
- 滋賀縣史
- 社寺要覽
- 琵琶湖
- 近江地誌
- 水産の世界
- 郷土地理研究
- 近江蒲生郡誌
- 神社由緒記
- 在郷軍人並家門表彰者概要
- 近江史蹟
- 日本有用魚介藻類圖説

(三) 口碑傳説によるものゝ方法上の注意

古代の口碑傳説は、國民の志操を具體的に示したものであるから、今日のやうな、科學的の頭からながめては到底信じられぬ事が多いけれども、私達の祖先は之を信じて來たのである。

今日の國民思想も、其の源はこゝから出發してゐるので幼稚ではあるが、此の具體的な口碑傳説に對しては、よくその中に一貫して流れてゐるその時代の思想を把握しなければならぬ。

然らば如何にしてこの口碑傳説を研究整理すればよいか。

- イ、傳説箇所の實地踏査
- ロ、古書、古文による調査
- ハ、郷土の古老の言
- ニ、古代器物による調査

四、郷土研究項目の實際

(一) 修自科郷土研究項目

(二) 郷土の出征軍人並に戦死病歿傷者

(1) 各戦役に於ける郷土の出征軍人並に戦死病歿傷者調査

戦名	出征人員	戦死者	病死者	負傷者	其の他

四、郷土研究項目の實際

(2) 西南ノ役、日清ノ役歐洲各戰役に於ける郷土の出征者戰死病歿傷調査

戦名	出征者	字名	戦死及病別	戦死病歿傷者の場所	年齢	階級

(三) 出征及び入營時に於ける郷土民の奉仕状況

(1) 出征及び入營時に於ける郷土民の奉仕状況調査

【注意】(イ) 各戦役別に調査のこと

(ロ) なるべく具體的に調査のこと

(2) 郷土民の兵役義務に對する態度

(三) 郷土の信仰迷信

(1) 郷土の迷信調査

迷信事項	理由	由	其	の	他

【注意】 具體的事項を列挙すること

(2) 郷土の信仰迷信状態

(四) 郷土の孝子、節婦、忠僕、其の他の表彰者

(1) 郷土の孝子、節婦、忠僕、其の他の表彰者調査

被表彰者	表彰の種類	月日	表彰者

(2) 郷土の孝子、節婦、忠僕、其の他の表彰者に關する研究

(五) 郷土の民性の趨向

(1) 郷土民の教育に對する態度

(イ) 郷土の教育的行事への郷土民の會合状況

(ロ) 郷土の教育費に對する郷土民一般の態度

(ハ) 郷土民の教育的見解の考察

(2) 郷土民の政治に對する態度

(イ) 郷土に行はるゝ選舉状態

(ロ) 郷土民の政治的見解の考察

(3) 郷土民の禮儀作法よりの考察

四、郷土研究項目の實際

- (4) 郷土民の衣食住による考察
- (5) 郷土の各字別國族調査

大字名	戸数	國族所有者数	所有せざるもの数	所有せざる理由

(六) 郷土の風習

- (1) 郷土の風習状況
- (2) 郷土の料理店の状況
- (3) 郷土の改良すべき風習事項の考察

(七) 郷土の代表的人物

- (1) 郷土の代表的人物調査

(産業方面、土木方面、交通方面、教化方面、自治方面に互り調査)

氏名	字名	事業	大要

- (2) 郷土の代表的人物の郷土に及ぼす影響

(八) 郷土の時間勵行状態

- (1) 郷土の時計調査

大字名	時計種類	柱時計	懐中時計	腕巻時計	置時計	戸数	時計なき家

- (2) 各種會合に於ける郷土民の時間勵行状態

(九) 郷土の小作問題

- (1) 郷土に於ける小作問題調査
- (2) 郷土に於ける地主對小作人の關係調査

四、郷土研究項目の實際

(十) 郷土民離村及び歸農の傾向

(1) 最近十ヶ年出入寄留調査

年度	離村人数	方面	理由	歸農人員	方面	理由

(2) 郷土民離村状況

(3) 郷土民歸農状況

(十一) 郷土の在郷軍人

(1) 郷土の役種及び等級別による在郷軍人調査

役種	中尉	少尉	曹長	軍曹	伍長	上等兵	一等卒	二等卒	輪卒	補充	計
現備											
歸休											
退役											
計											

(2) 郷土の兵種及び等級別在郷軍人調査

兵科/等級	步兵	騎兵	砲兵	工兵	輜重兵	航空兵	憲兵	海軍	經理部	衛生部	計
將校											
曹長											
軍曹											
伍長											
上等兵											
一等卒											
二等卒											
輪卒											
計											

補充兵																				
計																				

(十二) 郷土の財政状況

(1) 郷土の五萬圓貯金調査

種類	口数	一口金額	総額
甲種			
乙種			
丙種			
合計			

- (2) 郷土の基本財産調査
- (3) 郷土の村費、大字費十ヶ年比較統計
- (4) 郷土の村債調査
- (5) 郷土民の貯金額及び借金額調査
- (6) 郷土に於ける納税状況

(十三) 郷土の娯樂

(1) 郷土に行はるゝ娯樂調査

娯樂の種類	娯樂をする人の年齢	娯樂とする理由

(2) 郷土に奨励したき娯樂研究

(十四) 郷土の修養的團體

- (1) 郷土の青年團調査
- (2) 郷土の處女會、主婦會調査
- (3) 郷土の修養團、希望社加入團體調査
- (4) 郷土の修養的團體の活動状況

(二) 讀方科郷土研究項目

(一) 郷土に讀まるゝ新聞

四、郷土研究項目の實際

(1) 新聞調査

新聞名	購讀者年齢	性別	備考

(2) 大字別新聞購読調査

字名	購讀者数	字別戸数	戸数に対する購読者の比	備考

(3) 新聞の種類別より見たる郷土

新聞名	字名				

(4) 新聞調査による村の讀書思想

【注意】(1) 戸別調査に新聞雑誌数が正確か、否かを驗するため、新聞雑誌發達人に、村の新聞

雑誌種類及び現在の購讀者数を調査しておくことが必要である。

(2) 備考欄へは、同一新聞雑誌を家庭の中で讀んでゐる人幾人かを記入。

(二) 郷土に讀まるゝ雑誌

(1) 雑誌調査

雑誌名	購讀者年齢	性別	備考

(2) 大字別雑誌購読表

字名	購讀者数	字別戸数	戸数に対する購讀者歩合	順次

(3) 雑誌の種類別より見たる我が郷土

字名	雑誌名	備考

(4) 雑誌調査による村の讀書思想

(三) 郷土の方言

(1) 郷土の言語狀況

(イ) 在來の言語

四、郷土研究項目の實際

(ロ) 外來の言語

(2) 郷土の品詞別方言調査

(3) 郷土の品詞別方言正誤カード

正 (標準語)	誤 (方言)
------------	-----------

(四) 郷土の俚諺

(1) 郷土の俚諺調査

(イ) 農業に關するもの

(ロ) 衛生に關するもの

(ハ) 修養に關するもの

(2) 俚諺の出所理由

【注意】(イ) 努めて郷土的色彩濃厚なものをとる

(ロ) 俚諺の存する限り、出所理由あり

(ハ) 俚諺には時代的色彩濃厚なるものもあり

(五) 郷土の傳説(史實以外のもの)

(1) 傳説の調査(時代別、字別)

(2) 傳説を生みし理由の研究

(六) 郷土の口碑

【注意】(イ) 郷土の古老に尋ねること

(ロ) 文献に見えてゐても、郷土の人達には何時の間にか忘却せられてゐるものもある。

(三) 綴方科郷土研究項目

(一) 郷土の民謡

(1) 郷土の民謡調査

(1) 子守歌	(2) 羽根つき歌	(3) お手玉の歌
(4) 田植歌	(5) 草取歌	(6) 苗取り歌
(7) 米搗歌	(8) 麥搗歌	(9) 地搗歌
(10) 臼挽歌	(11) 餅搗歌	(12) 草刈り歌
(13) 糸とり歌	(14) 馬子歌	(15) 舟歌
(16) 桑つみ歌	(17) 漁祝ひ歌	

四、郷土研究項目の實際

民謡の種類名 歌詞

備考

(2) 郷土の民謡の歴史的沿革

(3) 郷土民の民謡に対する態度

(二) 郷土と和歌、漢詩

(1) 郷土を詠める和歌調査

題	和歌	作者

【注意】古今を問はず集めたい。

(2) 郷土を詠める漢詩

題	和歌	作者

(3) 郷土民と文學趣味

(四) 書方科郷土研究項目

(1) 郷土に於ける大家の書

種類	地質	揮毫語句	書體	筆者	時代及經過年數	時價	大サ	大字	所有者

【注意】(1) 調査に先立ち記入形式に付充分會得し置くこと

(2) 種類は軸、額、色紙等、地質は紙か、絹地か、時代及び經過年數は徳川初期或は何年前、大きさはたて、よこの寸法を明記すること。

(五) 算術科郷土研究項目

四、郷土研究項目の實際

(一) 學校より各地點までの距離と時間

(イ) 各字元標までの距離と時間

字	名	距	離	時	間

(ロ) 遠足地までの距離と時間

遠	足	地	距	離	時	間	學	年

(ハ) 主要地點までの距離と時間

地	名	距	離	時	間

【注意】(イ) 教師兒童共に實測する。この場合、測鎖をもつて測定せば比較的誤差少なし。

(ロ) 歩測計により、又時間によつて測定し、又は元標によつて概算する。

(ハ) 主要地點とは所轄警察署、郵便局、停車場などを指す。元標、村勢一斑、其の他文献によつて調査する。

(二) 學校内に於ける度量衡標示——校舎の長さ、運動場、農園等の廣さを測定し標示する。

(三) 各種別租税調査——村勢一斑による。

(四) 主要日用品物價調査

品	目	數	量	價	格

【注意】産業組合、各商店で調査せしむ、時季により變動があるから、時々調査の必要あり。

(五) 山のせくらへ

四、郷土研究項目の實際

山名	高さ

【注意】 國、縣の代表的の山をあげ、郷土の山々と其の高さを比べる。(河川、湖沼等も之に準ず。)

(六) 國史科研究項目

(一) 郷土史の研究

- (1) 郷土の歴史的沿革
- (2) 行政的沿革—封建時代に於ける管轄所屬、石高

管	轄	所
屬	石	高

(二) 郷土の神社、寺院調査

(1) 神社調査

神社名	社格	祭神	創設年代	沿革	鎮守地	神寶	例祭及行事	氏子数

(2) 寺院調査

寺院名	本尊	開基年月	宗派	所在地	寺寶	沿革	檀家数

(三) 郷土の口碑傳説調査

(四) 郷土の宗教研究

- (1) 宗教に對する一般人の態度
- (2) 神社、寺院等の負擔金額調査

神社	社	寺	院
負擔金額	負擔名目	負擔金額	負擔名目
計			

四、郷土研究項目の實際

(五) 郷土の金石文研究

(1) 郷土の金石文調査

型	式	物	質	銘	文	其 他	注 意

【注意】 型式は彫刻、鑄出銘、朱書、墨書のいづれなるかを記入すること。
物質は金屬、岩石、瓦、木のいづれなるかを記入のこと。

(2) 郷土の金石文の歴史的考察

(六) 郷土の古文書研究

(1) 郷土の古文書調査

年	代	内	容	筆	者	備	考

(2) 郷土の古文書の歴史的考察

(七) 郷土の年中行事研究

(1) 郷土の年中行事調査

月	日	郷土年中行事	行事の中心地

(2) 郷土の年中行事と郷土の風俗關係考察

(八) 郷土の國寶に就ての研究

(2) 郷土の國寶調査

大	字	名	所	在	地	種	類	品	目	個	數	指	定	年	月

(A) 木像に関するもの

(B) 書畫に関するもの

(C) 特別保護建造物に関するもの

四、郷土研究項目の實際

(2) 郷土の國寶の歴史的考察

(九) 郷土の古書、古記録、古寫本の研究

(1) 郷土の古書、古記録、古寫本調査

種	類	年	代	筆	者	内	容

(2) 郷土の古書、古寫本、古記録による古來の學問文化の考究

(一〇) 郷土の家系圖研究

(1) 郷土の家系圖調査

(2) 郷土の家系圖による郷土の歴史的考察

(一一) 郷土史地圖

(1) 庄園圖

(2) 藩領圖

(3) 遺跡圖

(一二) 郷土史年譜

(七) 地理科郷土研究項目

(一) 郷土の位置、地勢、廣袤

(1) 位置、地勢、廣袤調査

位	置	地	勢	廣	袤

(2) 郷土の位置の産業に及ぼす影響

(3) 郷土の位置の風俗に及ぼす影響

(4) 郷土の地勢の産業及び風俗に及ぼす影響

(5) 郷土の行政區劃の地理的沿革

(6) 郷土の小地名の調査。(小地名圖作製)

(二) 郷土の人口、戸數

四、郷土研究項目の實際

(1) 人口及世帯数調査

大字名	本籍人口		現住人口		世帯数
	男	女	男	女	

(2) 人口動態調査

(A) 三年間に於ける人口異動

年度	出生		死亡		死産	婚姻	離婚
	男	女	男	女			

(B) 各大字別、七年間の人口戸数異動

大字	年別		年別		年別		年別		年別	
	人口	戸数	人口	戸数	人口	戸数	人口	戸数	人口	戸数

(3) 出入寄留者調査

府縣名	出寄留者		入寄留者	
	男	女	男	女

- (4) 聚落分布状態の研究 (聚落分布地圖の作製)
 - (5) 大字別部落人口密度の研究 (部落人口密度圖の作製)
 - (6) 郷土の境界の特質研究
 - (7) 郷土の移出入原因調査及び之が研究
 - (8) 郷土の土地利用調査
- (三) 郷土の氣温、雨量、湿度
- (1) 郷土の氣温、雨量、湿度調査

月別	氣温			湿度			降水量	降水日數
	最高	最低	平均	最乾	最濕	平均		

四、郷土研究項目の實際

(2) 郷土の気温雨量湿度五ヶ年比較調査

年 別	氣 温			湿 度			降 水 量	降 水 日 数
	最高	最低	平均	最乾	最湿	平均		

(3) 郷土の氣壓調査

月	氣 壓		
	最 高	最 低	平 均

(4) 郷土の初霜、晩霜、初雪、晩雪並に積雪量調査(五ヶ年)

年 度	初 霜	晩 霜	初 雪	晩 雪	積 雪 量

(5) 郷土の気温、雨量、湿度平均と滋賀縣及び日本の気温、雨量、湿度平均との比較

郷土	滋賀縣	日本	郷土	滋賀縣	日本	郷土	滋賀縣	日本	郷土	滋賀縣	日本
氣 温			雨 量			湿 度			平 均		

(6) 郷土の氣候が産業及び住民に及ぼす影響

(7) 郷土の自然的災害調査

年 度	旱 魃 反 別	洪 水 反 別	暴 風 害	害 虫 災 害

(8) 郷土の地形が氣候、作物に及ぼす影響

(四) 郷土の産業

(1) 郷土の農家戸數と耕地平均調査

地 別	農 家 戸 數			農 家 一 戸 平 均 耕 地 反 別			
	畑	山林	原野	計	畑	山林	原野

四、郷土研究項目の實際

(2) 郷土の農家戸数と所有耕地別調査

種別	五段未満	五段以上	一町以上	三町以上	五町以上	十町以上	計

(3) 郷土の主要農産物調査

種類	栽培段別	数量	農家一戸平均額

(4) 郷土の牧畜五ヶ年比較調査

年度	牛	馬	豚	養鶏	養鴨	養鶏戸数	全戸に對する平均
				戸数	羽数	戸数	

(5) 郷土の養蠶五ヶ年比較調査

年度	養蠶戸数	收購高

(6) 郷土の水産物五ヶ年比較調査

年度	水産物

(7) 郷土の工産物五ヶ年比較調査

年度	工産物

(8) 郷土の林産物五ヶ年比較調査

四、郷土研究項目の實際

年度	種別	郷土	滋賀縣	日本

(15) 郷土の主要産物と滋賀縣及び日本との五ヶ年比較調査

年度	種別	石	村	郷土	滋賀縣	日本

(16) 郷土の職業別戸數分布狀況（職業別戸數分布圖の作製）

(五) 郷土の交通

(1) 郷土の交通調査

郵便	電信	ラジオ	道	路	荷	車	自	轉	車
			縣道	村道	里道	牛車	中	小	車

- (2) 郷土の交通路變遷調査
- (3) 郷土の交通改良點の研究

(六) 郷土の社寺

(1) 郷土の神社調査

縣社	村社	無格社	計	境内社	神職

(2) 郷土の寺院調査

天台	淨土	臨濟	曹洞	眞宗	計	住職

(3) 郷土民の信仰狀態調査

天台	淨土	眞宗	天理	金光	キリスト	神道	兼信

四、郷土研究項目の實際

(七) 郷土の財政

(1) 郷土の財政の變遷調査

年	度	財	政

(2) 郷土の社會經濟狀況

(八) 理科科郷土研究項目

(1) 石油發動機調査

發動機名	馬力	定價	製造所	昨年 に於ける 石油 使用量

字 名 氏 名

(2) 電力發動機調査

發動機名	馬力	定 價	製 造 所	昨年 に於ける 電力 使用量

字 名 氏 名

【注意】 一般に使用さるゝ發動機について記入のこと

(3) 郷土民の電氣に對する知識の普及狀態の研究

(二) 郷土の植物

(1) 郷土の植物調査

(a) 草本植物

- | | | | | | |
|---|---------|----|----------|----|---------|
| 1 | きく科 | 6 | らん科 | 11 | まめ科 |
| 2 | 禾本科 | 7 | たで科 | 12 | おとぎりさう科 |
| 3 | おもだか科 | 8 | うましあしがた科 | 13 | あかはな科 |
| 4 | かやつりぐさ科 | 9 | いはうめ科 | 14 | 繖形科 |
| 5 | ゆり科 | 10 | いばら科 | 15 | りんどう科 |

四、郷土研究項目の實際

- 6 くまつづら科
- 17 唇形科
- 18 ごまのはぐさ科
- 19 あかね科
- (b) 木本植物
 - 1 へんろうだ科
 - 2 うこぎ科
 - 3 あけび科
 - 4 すいかづら科
 - 5 ゆきのした科
 - 6 ぶどう科
 - 7 やなぎ科
 - 8 うづらふぢ科
- (c) 羊齒植物
 - 1 ひかけのかづら科
 - 2 うらじろ科
 - 3 うらぼし科
- 20 おみなへし科
- 21 ुरり科
- 22 ほしくさ科
- 23 みそはぎ科
- 24 あやめ科
- 25 瓜科
- 26 茄科
- 9 じんちやうげ科
- 10 ぐみ科
- 11 くらうめもどき科
- 12 くすのき科
- 13 そよこ科
- 14 くは科
- 15 ひるがほ科
- 16 うるし科
- 17 しやくなげ科
- 18 いちい科
- 19 みつぼうつき科
- 20 ひゝらぎ科
- 21 松柏科
- 22 石南科
- 23 ぶな科

(三) 郷土の動物

(1) 郷土の動物調査

- (a) 獸類
 - (1) 食肉類
 - (2) 有蹄類
 - (3) 齧齒類
 - (4) 翼手類
 - (5) 食蟲類
- (b) 鳥類
 - (1) 猛禽類
 - (2) 攀禽類
 - (3) 鳴禽類
 - (4) 鳩類
 - (5) 鷄類
 - (6) 涉禽類
 - (7) 游禽類
- (c) 昆蟲類

4 ふさしだ科

(d) 水藻科

1 とちかゞみ科

(e) 菌類

擔子菌類

(2) 郷土の地勢及び氣候の植物に及ぼす影響

(3) 郷土に於ける植物の分布状態(植物分布圖作製)

5 こけしのぶ科

2 ありのとう科

3 ひるむしろ科

- (1) 鞘翅類 (2) 膜翅類 (3) 鱗翅類 (4) 雙翅類 (5) 脈翅類
- (6) 直翅類 (7) 有吻類
- (d) 爬虫類 (1) 龜類 (2) 蛇類 (3) とかげ類
- (e) 兩棲類 (1) 無尾類 (2) 有尾類
- (f) 蠕形動物
- (g) 甲殻類
- (h) 節足動物
- (i) 魚類 (1) こひ科 (2) はぜ科 (3) なます科 (4) どじょう科 (5) さけ科
- (6) うなぎ科 (7) やつめうなぎ科 (8) めだか科 (9) かちか科
- (j) 介類 (1) 巻貝 (2) 二枚貝
- (k) 寄生蟲

(2) 郷土の地勢及び氣候の動物に及ぼす影響

(3) 郷土の動物の分布状況

(四) 郷土の鑛物

(五) 郷土と湖水

(1) 郷土の湖水の水溫調査

(2) 郷土の水溫と魚族來游の關係

(九) 手工科郷土研究項目

(一) 郷土の名彫刻物

作品の種別	作者名	作品名	時	價	時代及經過年	大	さ	大	字	所有者

【注意】 (1) 調査に先立ち記入形式を充分會得しておくこと

(2) 作品の種別とは銅か、石かの如く。時代及經過年數は、大和時代或は何年前と明記すること

四、郷土研究項目の實際

(二) 郷土に於ける主要諸細工物
竹細工、粘土細工、木工細工、石材細工、薬細工、金工細工について、之を蒐集する。

(十) 圖書科郷土研究項目

(一) 郷土に於ける名畫

種類	繪の區別	地質	筆者 (筆號)	講辭と其 の筆者	時價	時代及經 過年數	大きさ	大字	所有者

【注意】(1) 戸數調査に先立ち記入形式に付充分會得しおくこと。
(2) 種類は人物か、山水かの如く、其の區別は墨繪か、淡彩か等、地質は紙か、絹地か、時價不明の時は賣買せし時の價にても可、時代又は、經過年數は、安土時代又は、三百年前(昭和何年より)の如く、大さは、たて尺寸、よこ尺寸と明記すること。

(二) 郷土各戸の紋所調査

家紋(寫)	紋名	女の紋(寫)	紋名	紋の由來	大字名	氏名

【注意】(1) 實地に調査するに當り實物を寫生すること。
(2) 紋の由來は現在の戸主が何年前某家より分家したるにより本家の家紋を用ふ。
(3) 郷土の紋所地方的分布状態。
(4) 郷土の紋章の習慣及び之が研究。

(三) 郷土の風景畫及び寫眞

【注意】(1) 風景繪葉書を集めること。
(2) 折にふれ寫眞撮影をなすこと。

(十一) 唱歌科郷土研究項目

(一) 郷土の蓄音機レコード調査

曲種	曲目	字 名 氏 名		
		作曲者、作歌者	演奏者	製造所

【注意】(1) 唱歌に關するものは一枚／＼記入のこと。
(2) 他のレコードは何々何枚 記入のこと。

四、郷土研究項目の實際

(二) 郷土の樂器調査

字 名 氏 名

樂器の種類	定	價	製 造 所	其 他

【注意】(1) 玩具ならざること。

(2) 蓄音機も記入のこと。

- (三) 郷土の音樂的沿革研究——民謠、俗謠その他郷土流行の歌謠とその曲調
- (四) 郷土の樂器調査及び蓄音機レコード調査による郷土民の音樂的趣味研究

(十二) 體操科郷土研究項目

- (一) 適齡検査に於ける合格、不合格、歩合、累年

年 度	受 檢 人 員	合 格 者 數	合 格 者 歩 合

(二) 各種運動の達人及レコード

年 度	種 目	レコード氏名	最近日本のレコード

(三) 兒童生徒の身體検査

【注意】 本表を購校並びに文部省標準と比較對照すること。

- (四) 古より行はれる體育的施設
- (五) 近代的體育施設及び其の普及狀況
- (六) 郷土民の體育に對する理解程度

(十三) 裁縫科郷土研究項目

- (一) 郷土に使用さるゝ裁縫ミシン機

(1) ミシン機調査

四、郷土研究項目の實際

種類	経過年数	使用者 (氏名 年齢)	大字名	使用目的	備考

(2) ミシン機使用調査より観たる郷土の裁縫法の傾向

(3) ミシン機使用調査より眺めたる郷土の時代的衣履變遷

【注意】 調査表の使用目的欄は職業上か實用的か將趣味的なるかを記入。備考欄には如何なる物を縫ふか其の種別に就きて記入。

(二) 郷土の裁縫塾

(1) 裁縫塾調査

大字名	塾		官許の有無	徒弟数
	流派	師者 出身校名		

(2) 裁縫塾調査の結果是が郷土の裁縫界に及ぼす影響

【注意】 調査表の流派の欄に就きては自己の所信に基きて記入すること。

(三) 常服の仕立

(1) 常服仕立に就て他家へ依頼さるゝ家庭調査

大字名	依頼		理由
	病弱	家業多忙	

(2) 常服仕立業者

大字名	氏名	名目	目的

(3) 常服仕立調査に依る郷土の家庭生活状況

(四) 裁縫技術の熟達能練者

(1) 裁縫技術の熟達者調査

大字名	氏名	略歴(出身校と生ひ立)	現在職

四、郷土研究項目の實際

洋服を着て居る人数	織羽				帯				襟	マ	コ	
	半	袖無し(でんち)	綿入羽織	袷羽織	単衣羽織	名古屋帯	三尺帯	単衣帯				腹合帯(晝夜帯)
大人 男 女												
人 子 供												
人 男 女												
人												

(2) 郷土の特殊的衣服調査

種	作					類	枚	数	名	稱
	田	菫	掃	炊	其					
植	刈	除	事	の	他	着				
着	着	着	着	着	着	着				
種	田	菫	掃	炊	其	類	枚	数	名	稱

(3) 不斷着保存年限調査

不斷着保存最古經過年數	名	稱	織	維

(4) 特殊的衣服より觀たる郷土の風習

【注意】衣服枚數調査は其の眞實を調査する爲袋に封入して無名にて提出せしむること。

四、郷土研究項目の實際

- (3) 郷土の土性による施肥量及び施肥法の研究
- (4) 郷土の土性による耕耨の方法用具及び深耕の能否研究
- (5) 郷土の土性と耕耨勞力との關係研究
- (6) 郷土の土性に適應せる作物の調査及び研究
- (7) 郷土の未開墾地及び湖水埋立餘地調査
- (8) 郷土の灌概排水調査
- (9) 郷土に必要な灌漑設備研究
- (10) 郷土の田畑地の賣買價格十ヶ年比較
- (11) 郷土の地目別土地調査

土地の種類	郷土の各種土地			我家の土地 所有面積	我家の耕作 經營面積	我家の土地 利用方法
	田	畑	地			
田						
畑						
地						
園						
敷						
森						
原						
池						
雜						
種						
地						

- (12) 郷土の耕地利用法の研究
- (13) 郷土宅地利用法の研究

(二) 郷土の農業經營狀態

- (1) 郷土勞力調査
- (2) 郷土に於ける休日日數及び勞働時間の季節別調査研究
- (3) 郷土に於ける作業別農業勞働賃銀と支配方法の研究
- (4) 郷土に於ける農業經營狀態調査

特 用 作 物	調查項目	種別				
		大	反	收	入	差
蒞	蒞					
蒞	蒞					
蒞	蒞					
蒞	蒞					
蒞	蒞					
蒞	蒞					
蒞	蒞					
蒞	蒞					
蒞	蒞					

冬 作			林 山 及 畑					調査項目 種別
紫 雲 英	菜 種 作	麥 作	山 林	竹 林	桑	果 樹	蔬 菜	
			反					反
			別					別
			收					收
			量					量
			收					收
			入					入
			支					支
			出					出
			差					差
			引					引

夏 作		調査項目 種別
作	稻	
		反
		別
		收
		量
		收
		入
		支
		出
		差
		引

- (5) 郷土に於ける農業經營状態の考察
- (6) 郷土の農家の生産物共同販賣法の研究
- (7) 郷土の農家一ケ年間収入累年比較
- (8) 郷土の副業調査
- (9) 郷土に適當せる副業研究
- (10) 郷土の購入肥料及び自給肥料十ケ年累年比較

四、郷土研究項目の實際

年次	購入肥料					自給肥料				
	大豆	粕	安	其他	堆肥	厩肥	水	薬	野草	
大正十年	数量	價格	数量	價格	数量	價格	数量	價格	数量	價格
大正十一年										
大正十二年										
大正十三年										
大正十四年										
大正十五年										
昭和二年										
昭和三年										
昭和四年										
昭和五年										

- (11) 郷土に奨励したき自給肥料の研究
- (12) 郷土の農業經營の考察による改善事項

(三) 郷土の産業

- (1) 郷土の家畜
 - (イ) 郷土の家畜調査
 - (ロ) 郷土に適當なる家畜研究
- (2) 郷土の養蠶業
 - (イ) 郷土の養蠶調査
 - (ロ) 郷土の養蠶業の缺陷
- (3) 郷土の林業
 - (イ) 郷土の林業調査
 - (ロ) 郷土の林産物調査
 - (ハ) 郷土の林業の缺陷とその對策
- (4) 郷土の水産業
 - (イ) 郷土の水産業調査

四、郷土研究項目の實際

(口) 郷土の水産業の缺陷及び水産物の加工法の研究

(四) 郷土の農業關係團體

(1) 産業組合農業倉庫利用狀態調査

		有限責任 島村信用販賣購買組合	
		總額	一人當
者數	額額金	加出貯借貸	米
入資	金入付	賣販同共	米
			其他
者數	額額金	買購同共	計生
			產生
		項要	利
庫倉業農			保管
			造荷
			製調
			搬運
			考備

(2) 郷土の農業關係團體調査

(3) 郷土の農業關係團體の指導法

(五) 郷土の主要産物累年統計

年度	作物名	作		前	同	前	同	前	同
		別反物作	量數總反						
大正九年	稻	量收當反	量收當反	均平當戸一	前	同	前	同	前
大正十年	麥				前	同	前	同	前
大正十一年	菜種				前	同	前	同	前
大正十二年	藎				前	同	前	同	前
大正十三年	葎				前	同	前	同	前
大正十四年					前	同	前	同	前
昭和元年					前	同	前	同	前
昭和二年					前	同	前	同	前

四、郷土研究項目の實際

【注意】 商店より既成品を購入するものと自家に於て製するものとあり。

一ヶ年間の消費高は自家製造者には材料を計上せしめ既成品使用者と併せて記入せしむ。

(2) 木炭について

一ヶ年間消費高	總	額	一戸平均消費高
	円	錢	円
			錢

(二二) 本村民と嗜好品

種類	一ヶ年間の消費高	一戸平均消費高	愛好するやうになつた動機
煙草 (巻煙草 きざみ)			
茶			
珈琲			
酒			
其他			

【注意】 各戸別に調査せなければならぬが誰しも赤裸々に發表をせないものであるから調査表紙は無記名で而も密封せしむる位にせなければ正確なる結果は得られぬ。

(二三) 醫師に関する調査

郷土に於ける醫師名	住 所	主 治 科	廢業年月日

(二四) 助産婦に関する調査

氏 名	住 所	學 歴 及 び 開 業 年 月 日

(二五) 郷土の民家一週間献立調査

日 時 階	級	主 要 食 物	副 食 物	備 考

【注意】階級は上中下とすること。

(二六) 郷土の家屋の調査

字	別	平家数	二階建数	カ	ワ	ラ	ブ	キ	その他

(二七) 郷土の家屋と産業其の他との関係考察

(二八) 郷土の間取圖調査

(二九) 郷土に行はれる迷信的醫療法

(三〇) 郷土の衛生についての改善事項

(三一) 郷土の名所改善事項

(三二) 郷土の病名別による死亡數と年齢別による死亡數との比較研究

(三三) 初婚者の年齢調査

第三編 各科郷土化の實際

第三編 各科郷土化の實際

(各教科郷土化の細部に亘つては、紙數の都合上こゝでは省略して、その一部分をのせておくことにする。進んで郷土化についての私達の意見を聞いてやらうとせらるゝ方は、本書の姉妹編明治圖書發行「各教科郷土化の實際」を読んで頂ければ幸甚。)

(一) 修身科郷土化の實際

尋常小學第六學年修身

課	題	郷土化要項	郷土化及郷土研究との聯絡	資料室郷土讀本との聯絡との聯絡	注意事項
第二課	國運の發展	村の沿革 歳出入 教育交通産業	1、明治初年に於ける島村 イ、村及役場の沿革 ロ、歳出入累年豫算 ハ、教育、交通、産業の沿革 郷土研究 イ、島村及役場の沿革	島 歳 出入 果 表	

一、修身科郷土化の實際

第五課	忠君愛國	忠君愛國者	1、西南の役 2、明治二十七八年戦役 3、明治三十七八年戦役 4、歐洲戦亂 以上の戦死病死者の略歴を知らしむ 郷土研究 イ、出征軍人並に戦死病死者調	戦死者 の寫眞 忠魂碑
第七課	祖先と家	我家の祖先につきて	1、祖先累代の系圖 2、祖先累代の略傳 3、家の紋につきて 4、墓の位置につきて 5、家の構造と建築した祖先の名 6、財産につきて	

第十四課	慈善			
第十八課	國民の務	國民皆兵 徴兵検査 租税 村會 議員 選舉 陪審員	今江惣兵衛の救護につきて 1、村豫算につきて 2、島村の國民兵及兵役關係につきて 3、租税の種類別總額及滞納者につきて 4、各種議員及選舉人につきて 5、陪審員資格者につきて 郷土研究 イ、各種議員定數及有権者數 ロ、各種委員 ハ、國縣稅村稅 ニ、納稅狀況	納稅告 知書、 各種租 稅表、

(二) 讀方科郷土化の實際

高等小學第一學年農村讀本卷一

一、讀方科郷土化の實際

課	題目	郷土化要項	郷土化及郷土研究との聯絡	郷土讀本との連絡	資料室との連絡	注意事項
一	昭憲皇太后御歌	全課	郷土に關する和歌を知らせしむ。殊に郷土讀本中の古歌の指導もしたい	第十一課 鳥村を詠める		
三	先づ農を重んぜよ	全課	全科に亘つて郷土的色彩濃厚なり。殊に農村離村の傾向ある今日、本課を力説したい。	郷土の職業別調査 第二十六課 將來の鳥村		
四	松の根	松の根	兒童の觀察發表及び如何なる困苦とも戦ふ郷土民たれ。			
八	洞庭湖	琵琶湖	琵琶湖と洞庭湖の比較 二十七頁の挿繪と鳥村圖の比較	第六課 琵琶湖の汽船		
十	山村	山村 面積三方里 豆腐屋 菓子屋 酒屋	全課の郷土的取扱が必要 我が郷土との比較 我が郷土の面積 一、七四六方里 郷土に於ける具體的例	第二課 鳥村		

十一	教へ草	教へ草	田起しの時期 種蒔の時機其他、體驗發表 郷土に於ける田植歌 綴方郷土研究 俚語調査参照 兒童の體驗發表 奥津島神社の祭例の有様 大鳥 兒童の體驗發表	第三課 奥津島神社 大鳥	鷺馬の寫眞	
十二	動物を愛せよ	動物を愛せよ	本校に於ける動物愛護デーの状況を知らしむ	第二十課 我等の學校		

十三	麥秋	麥秋 蛙が鳴く 蚊が出る ぶゆが出る	全課郷土に關聯事項多し 兒童の體験
十四	海の朝	海の朝 船歌 きらめく沖 群立つかも	郷土湖邊の朝と相似する所多し 郷土に於ける船歌を知らせる 綴方科郷土研究 俚諺の章參照 兒童の觀察發表
十五	我が國の 水産業	我が國の水 産業	郷土の水産業及び之の改善方法 農業科郷土研究 水産に關する調査參照
十七	征衣上途	征衣上途	郷土に於ける出征軍人、及び戦死者を 知らせる 修身科郷土研究 (イ)出征軍人並戦病及死傷者調
		第十八課 忠魂碑	
		村勢一班	

二十	害虫とそ の驅除	稻の害虫	(ロ)出征及入營時に於ける村民の 奉仕狀況の章參照 郷土の稻の害虫を知らしむ 農業科郷土研究 郷土の病虫害調査及び之が豫防法 の章參照	稻の害 虫標本
二十一	夏の田圃	夏の田圃 片岡 山田 午後二時 夕暮	全文郷土的色彩濃厚 郷土に於ける具體的例 郷土に於ける午後二時の狀況は 郷土の夕暮は	
二十三	漁船歸る	漁船歸る 海幸	長命寺港のたそがれの狀況 郷土の湖幸の指導	第十四課 大綱ひき
二十六	統計	統計 男女の割合	郷土研究と統計との關係指導 各教科郷土研究の統計參照 郷土男女の割合	資料室 の圖表

三十郷土	郷土	地理科郷土研究 男女別人口調査参照	第二課 鳥村 第二十六課 將來の鳥村 第二十七課 我等が覺悟
新田	郷土	全課郷土讀本の編纂を要求してゐるし全く郷土的色彩に包まれてゐる。この課を終りたる後、現在の郷土の状況を知らしめ、理想の郷土を建設せしめんとするがために、先づ郷土を科學的に研究せんとする心をおこさしめること。 郷土にある新田をあげる。	我等が覺悟

(三) 綴方科郷土化の實際

尋常小學第二學年

郷土の行事	郷土的題材	指導要項	郷土讀本との連絡	資料室との連絡
入學式 觀學祭 灌佛會 神社例祭	二年生	(1)一年生に入學した妹、弟に對する感想 (2)過去一年間の兒童生活をおくつて、二年生となつた覺悟、そして喜悅如何。	第二十七課 我等の覺悟	
	ハル	(1)灌佛會の用意に草花を野路の其所、此所に求めた春の日永の農村兒童のよるこび。 (2)春風に、黄色なさいなみを立てる菜畑の上にまふ胡蝶、青々とのびた麥、美しく咲きほこつた忠魂碑附近の櫻花、我郷土の春景色はこよなくつかしく美しい。このなつかしい雰圍氣に無關心であるべきではない。 (3)私達の學校に春の姿を求めるならば、第一にチューリップ、アネモネの咲きほこる花壇寒さの去つた胎蕩たる氣候の中に元氣にたはむれてゐる家畜のやうす——春の姿である。 (4)氏神様の春祭り、たいまつを持つて興じたよみやのあり、ま、ごえんに山へ登つてよばれたおべんたうのおいしかつた事などの記述	第七課 鳥村十景 第二十一課 鳥村の唄 第二十課 我等の學校 第三課 奥津島神社 大津島神社	

	カナリヤ	<p>(1)二年生の教室の隅のカナリヤは時候のよくなると共に授業中もとんちやくなく、美しい聲でさへずる。児童はきつと何等かの感情をこのカナリヤに持つてゐる事と思ふ。</p>		カナリヤの標本
端午の節句	コヒノボリ	<p>(1)初夏の風に勇ましく空を泳いでゐるこひのぼり、村のそこ、に見える。 (2)自分の爲に立てられた我家の鯉のぼりに對しては一層の親しみのあることだらう。</p>		
発表會	ハツピヤウ クワイ	<p>(1)十五日にはれた発表會の實際。 ○見聞事項 ○最も印象深かつたこと。 ○我級の出演ぶり。</p>		
	ハマンへ行 ツタコト	<p>(1)用事があつて、八幡の町へ出かけやうとする家人に願つてお供をさせて頂く。 (2)いよ／＼八幡へ出かける。一里の道故相當の觀察事項があるであらう。</p>		

七夕祭	タナバタ	<p>(1)氏神様の森へ友達と共に行つた蟬取り。 (2)近くに聞える蟬の聲に誘はれて出て見た裏庭の梧桐の葉かけ、足音しのばせて、もち竿をさしのべて蟬を捕へた快感は経験者のみを持つつよるこびである。</p> <p>(1)星の話について ○牽牛星。織女星のこと。 ○天の川のことなど。 (2)「天の川」「七夕」など書いた短冊をつるした七夕笹を門に立て、夜空に美しくまた、く星を眺めながら催した七夕祭の様子</p>		蟬の標本
	ギョウ水	<p>(1)お風呂では暑いので、此の間から初められた行水は、子供にはお風呂より變化があつてよることばれる。 (2)白い夕顔の花が咲いてゐる裏庭で、喜々としてつかつた行水のおもしろさを児童は喜んで表現するであらう。</p>		

孟蘭盆會	なつやすみのこと	<p>(1)舟遊びした事について ○家族と共に伊崎の棹飛を見に行つたこと。 ○岡山、松ヶ崎について水泳したこと等。 (2)盆の日のありさま ○父母に連れられての墓まゐり。 ○川へ御聖靈を流しに行つたこと。 ○親類の人達が來られたこと。 (3)旅行をした事について ○京都の親類の家へ行つたこと。 ○大阪の親類へ行つて、海水浴したありさま。</p>	第二十課 我等の學校
親月會	ひつり	<p>(1)學校の畜舎の編羊 ○二匹たのしくたはむれてゐるありさま。 ○當番の人達から餌をもらつてゐるありさま。</p>	
お月見	ひつり	<p>(1)お月見の用意に山に登つてすゝきを取り、まくわをもぎ、だんごをつくり、喜び勇んでお供へ物をととのへた事であらう。 (2)さて一家そろつての觀月のありさま、満月</p>	

	くりひろい	<p>は我が郷土の野山に、人家に、琵琶湖に光をそゝいでゐる。</p>	
連動會	うんどうくわい	<p>(1)絳綺那山に登つて、かご一ぱい拾つた栗の實、うれしい收穫である。 (2)母にうでて頂いて、おやつによばれた、かうばしい栗の味。</p>	
	きく	<p>(1)不斷の練習のうでをあらはすべきこの運動會、澄み切つた秋空の下に待ちに待つた運動會が開かれる。 (2)運動會見聞中、最も印象深かつた種目について。 (3)個人競技に一等賞をとつたよろこび、又のこりおしくも賞に入らなかつたかなしさ、來年こそは、の意氣。</p>	
	きく	<p>(1)香もかんばしい氣高い菊の花が咲きはぢめた。色とり／＼に家の庭に、學校の其所此所に。しつかり觀察させて、その觀察したこと</p>	

	年末	すゝはき	<p>を記述する。</p> <p>○教室の懸崖の菊</p> <p>○窓から見える鉢の大菊</p>
	新年	お正月のこと	<p>(1)一年中が一番嬉れしいお正月</p> <p>冬休みの思ひ出としてその全部をしめてゐる。</p> <p>○四方拜に参列して</p> <p>○双六、かるたとり、はねつきのあそび</p>
		ゆき	<p>(1)一面銀世界と化した島の雪景色。</p> <p>(2)校庭で行つた雪すべり。</p> <p>(3)お友達と一つしよにつくつた雪だるま。</p> <p>(4)登校の雪道のやうす。</p> <p>(5)上級の人達が元気に雪合戦してゐる有様を見物して。</p>

	節分	節分	<p>(1)「鬼は外、福は内」と豆まきする様子。</p> <p>2)一つ、二つと数へてよばれた、年越しのお豆。</p>
学藝會	うちのお母さん	<p>(1)この頃の児童の一番なつかしい、又親みの深い母についての描寫。</p>	
	がくげいくわい	<p>(1)劇、唱歌、舞踊と行はれた学藝會を見て、その見聞事項、所感の記述を指導する。</p> <p>○おもしろかつた劇。</p> <p>○上手にうたへた唱歌。</p> <p>○出演した感想。</p>	

(四) 算術科郷土化の實際

(1) 本校の算術科に對する態度

従來の教育が餘りに抽象的であつたことは、今や誰しもが高唱するところである。殊に算術科の教授に於て然りて、餘りに單的な形式的な概念的な處理に偏して居は

しなかつたか。そして都會に於ける該教授も、農村に於けるそれも、何等變ることなき一貫したものであつた。算術科のみではなく、教育のすべてが郷土を基調とした教育でなければならぬことは今更こゝにのべる必要もあるまい。

そこで本校算術科教授にあつて、其の根底を郷土の實情、事實に於て教材を精査し教授法を研究し、生きた教授、生きた學習を遂げたいと努力してゐる。之は生活に必要な我が郷土の唯一の算術であり、現在のこの方面に關する郷土民の缺陷も自然救済出来ることと信ずる。

(2) 各科郷土研究事項の活用。

算術科郷土研究事項をはじめ、各科郷土研究への數的交渉をなし、兒童の數量生活を豊にし、親しみをもたせて、生活に必要な計算能力を遺憾なく養ひ、以て我が郷土をよく理解せしめたいと思つてゐます。

(3) 教科書にあらはれたる問題の郷土化

算術科が只單に數字の計算や教科書の問題を解決するだけならば餘りに寂しい。餘りに無味乾燥なものとなり、兒童は興味を持たず、従つて成績も面白くなな、そこで

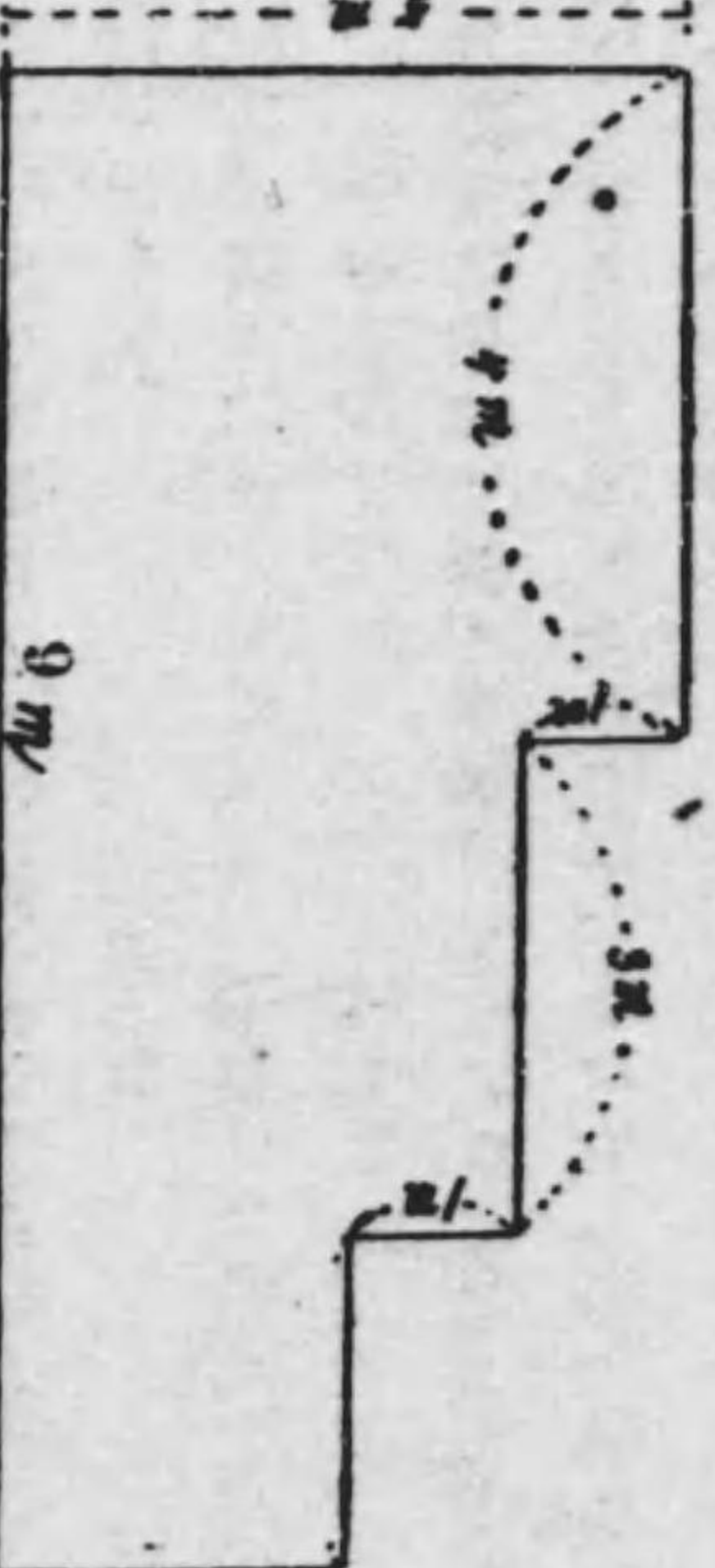
これ等の問題を、郷土の實情に立脚して作成し、解決せしむるならば、如何なる劣生兒と雖もよろこんで研究し、不知不識の間に計算能力が熟達するものである。この意味からしても、教科書にあらはれたる問題を郷土化すること、即ち兒童の生活に卑近な問題をつくつてやることが算術科學習に如何に必要なかを痛感するのであります。

(4) 計量生活の必要

算術科學習は業的である事が時々必要である。問題研究と密接な連絡をはかつて、實生活に必要な度量衡の使用法に就いて、作業を中心に、而も系統的に指導し練習せしめ、よく習熟せしめることは、算術科の取扱上、又見逃すことの出来ないものであり、之こそ我々の言ふ郷土教育である。今兒童をして運動場附近の道路を實測せしむる時に、彼等は如何によろこび、熱中することであらうか。これこそとりもなほさず眞に尊い生きた學習である。

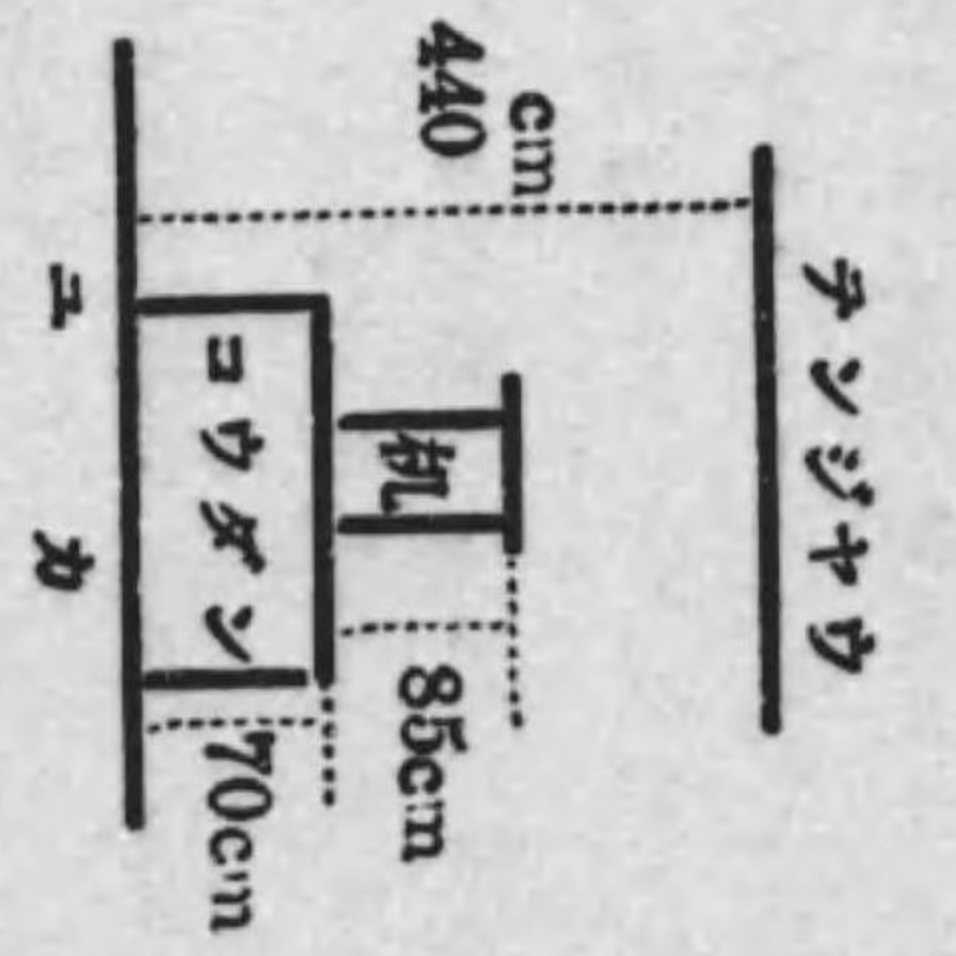
(五) 尋常科第三學年算術科の郷土化の實際

Page	題材	教科書にあらはれた名問題の郷土化	計量指導
8-17	[加] 法 1] [加] 法 2] [加] 法 3] [應用問題 1]	(1) 竹男さんは三年生になったので、お父さんと舟で八幡へ行つて、次の買物をしました。皆でいくらになりますか。 やうぶく 1圓90錢 ぼうし 70錢 かばん 75錢 (2) 鳥村では子供が昭和元年に 104 人、昭和二年に 80 人、昭和三年に 87 人、昭和四年に八十三人生れました。皆で何人生れましたか。 (3) 鳥村信用組合に姉さんが25圓 90 錢、私が18圓 45 錢、弟が5圓 36 錢貯金してあります。皆でいくらですか。 (4) 家室のばけつは 94dl 入りのが三つと 64.1 入りのが二つと 35dl 入りのが一つある、この六つのばけつには皆で幾リツトルの水を入れることが出来るか。 (5) 本校昭和四年四月の生徒数は尋常科は男135人、女157人 高等科は男 23人、女 20人であつた、皆で幾人居たか。	1 貨幣模型によつて任意の金錢を算出せしむること。 2 室内器具所持品の長さ及び身長測定。 3 室内廊下等の目測、歩測の練習と實測。 4 何リツトル何デレリツ

8-27	[減] 法 1] [減] 法 2] [減] 法 3] [減] 法 4] [應用問題 2]	(6) 昭和四年四月の身體けんさによると、本校ではむしはのある者が尋常科の男に 132人、女に 115人、高等科の男に 24人、女に 10人あつた、皆で何人むしはがあるか。 (7) 三年生で一番せいのひくいのは次郎君で 102cm である、又學校中で一番せいの高いのは校長先生で、次郎より 69cm 高い、校長先生はいくらか。 (8) これは(※)郷土圖の圖である。まはりの長さはいくらか。 	トルはいるかの實測。 5 運動場、學園等の測定 6 頭のまはり既圖をはかること。 7 以上實測による問題構成。 (※)學校郷土圖の實測 1 天秤により學用品、所持品、文庫の本等の重さを自由實
------	--	---	--

<p>28-31 [複習1] [應用問題3]</p>	<p>はどちらがどれだけ多いか。</p> <p>(3) 信用組合で2圓85銭の買物をしたので、5圓札をもってはらひに行つた、幾らつり銭をもちつたらよいか。</p> <p>(4) 学校の門から役場までは320m、中之庄の入口までは500mである。どちらがどれ程遠いか。</p> <p>(5) 三年生の算術書は100、讀本は165gある。どちらがどれだけ重いか。</p> <p>(6) 鳥村では風目のある家が317軒、ない家が45軒である。風目のある家はない家とは何軒多いか。</p> <p>(7) 一郎君のべんとうを箱のまゝはかつたら720gあつた。べんとうを食べてから箱をはかつたら140gあつた、べんとうの重さは幾らあつたか。</p> <p>(8) 本校は一年と二年と三年と四年とで203人居る。一年生と二年生と三年生とでは156人居る。四年生は幾人か。</p> <p>(9) 本校生徒女子全體は177人で、男子全體は女子全體より19人少ない。男子は何人居るか。</p> <p>○加減に関するもの</p> <p>(1) 正一が學校へもつてくるものをはかつてみたら、本など</p>	<p>測し比較すること、體重の測定比較。</p> <p>2 秤秤により種々のものを測定すること。</p> <p>3 實測による問題構成。</p> <p>1 枋測練習 :長きの目測</p>
--------------------------------	--	---

	<p>入れたかばんが1040g、おべんとうが620g、紙ばきみが350gあつた。皆で何gあつたか。</p> <p>(2) 讀本巻五のページ数は皆で102ページある。今65ページまでならつてゐると、あとに幾ページ残つてゐるか。</p> <p>(3) この間學校中のせいせきしらべがあつた。兄さんと姉さんと私と弟のとつた点数を合はせると301點である、そのうち兄さんは98點で、姉さんは75點で、私は85點である。弟は何點か。</p> <p>(4) これは本校講堂のこうだんと机の系である、机の上からてんじやうまではいくらありますか。</p> <p>(5) 110ページある圖書室の本をかりて昨日は32ページ、今日は47ページよんだ、まだ何ページ残つてゐるか。</p> <p>(6) この前の日曜にお母さんと買物に行つて私は1圓50銭する夏ふく、兄さんにも1圓80銭する夏ふく、妹に67銭するぼうしを買つて5圓札を出した、おつりは幾らか。</p>	<p>練習</p> <p>3 長さの歩測練習 (以上實測によつて確かめること)</p> <p>4 問題構成</p>
--	---	---



<p>33-39 [乗] 法 1] [乗] 法 2] [乗] 法 3] [應用問題] 4]</p>	<p>(7) 私は 14 錢持つてゐる所へ、兄さんから 50 錢いたゞいた。このうちから學校の賣店で 12 錢の小刀と 15 錢のクビナスを買つて、のこりを組合貯金にあづけやうと思つてゐる、いくら貯金が出来るか。 (8) 弟のせいは 960mm で、私は弟よりも 140mm 高く、姉さんは私よりも 66mm 高い、姉さんのせいは幾らか。</p>	<p>1 時計の見方の指導 2 秤によつて諸品の實測 3 ばけつ、鐵びん等各容器の容量比較、實測 4 巻尺によつて距離の測定</p>
<p>[乗] 法 1] [乗] 法 2] [乗] 法 3] [應用問題] 4]</p>	<p>(1) 全校生徒が朝會が操練の時兩手を上にあげたら皆で何本の手があるか。 (2) 學校賣店である日 4 圓 84 錢の賣上があつた。毎日これだけづゝ賣れるとしたら一週間(日曜をはぶいて)にはどれだけの賣り上げがあるか。 (3) 賣店で賣つてゐる女子スカート、一着つくるのに切れが 230cm 入る、8 人分のスカートをつくるには切れがいくらいるか。 (4) 1 本の牛乳びんには、およそ 2dl はいつてゐる。8 本ではいくらはいつてゐるか。 (5) 學校は毎日 15kg 入りの炭を 1 俵づゝ使ふ、一週間には何ヤログラム使ふことになるか。</p>	<p>1 時計の見方の指導 2 秤によつて諸品の實測 3 ばけつ、鐵びん等各容器の容量比較、實測 4 巻尺によつて距離の測定</p>

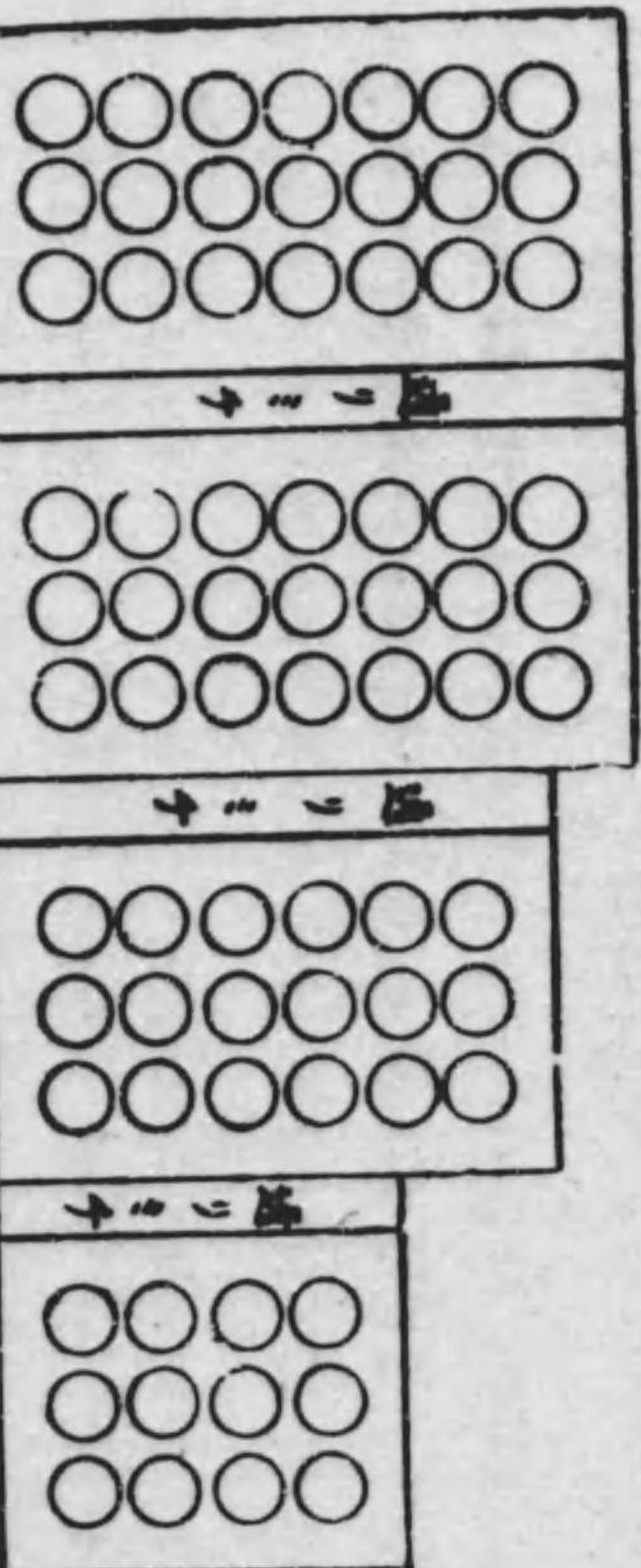
<p>40-49 [乗] 法 4] [乗] 法 5] [乗] 法 6] [乗] 法 7] [應用問題] 5]</p>	<p>(6) 學校運動場の徒歩用の圓は 1 回まはると 135m ある、これを 4 回まはると、何メートル走るか。 (1) 1 つ 4 錢する柿を 12 買ふと、お金はいくらゐるか。 (2) お米 1 俵には 731 はいつてゐる。36 俵では何リツトルはいつてゐるか。 (3) 學校のにはとりが前の月に卵を 275 うんだ。毎月 275 づゝうちとすれば 1 年にはいくら卵がとれるか。 (4) 學校から自分の家まで 1063m ある長命寺の生徒が 1 週間に 6 回學校を往復する、何メートル歩いたことになるか。 (5) 12 錢する學校賣店のクレオソを球一の男の生徒 22 人に買つてあげるとお金は皆でいくらになるか。 (6) 學校にフットボール、バレーボール、バスケットボールあはせて 13 ある、ボール 1 つのねだんどれも 5 圓 45 錢としたら、學校のボールは皆でいくらになるか。 (7) 1 時間に 265km とぶ八日市の飛行機は 14 時間にはいくらとぶか。又 24 時間では幾らか。 (8) 三年生の教室に机と腰掛が 8 つづゝ 4 列にならべてあ</p>	<p>1 短距離の自測練習 2 歩測 歩巾を測つて、學校より各地點まで歩測し、實測によつて、たしかむること</p>
--	--	---

50-53 [復習 2] [應用問題 6]

- (9) 机と腰掛の数は合せて幾つか、又この1つのこしかけに2人づゝかけて勉強してゐる、三年生は皆で何人か。
- (10) 賣店の重洋紙は1錢で2枚くれる。18錢では何枚くれるか。
- (11) 私の家から學校の門まで473足で行かれる、1足をはかつたら46cmあつた、家から學校の門までいくらあるか。
- (12) 私等は毎日學校で4時間づゝ勉強してゐる、26日には何時間勉強するか、又5時間づゝ勉強したら何時間になるか。
- (13) 正一の組合貯金は第一のときは2圓95錢、第二では4圓60錢、第三になつてからは今までに2圓14錢してゐる。10圓にはまだいくらならないか。
- (14) 本校の尋常科生は男女合せて292人、高等科生は男23人女20人である。今全校生徒におまんじゆを5つづゝあげると、皆で幾ついるか。
- (15) 私は學校からのかへり道、渡合橋から忠魂碑までの間を60cmの竹ではかつたら35へんとあまりが50cmあつた、この間はいくらあるか。

1 體量を互ひにはかり合ふこと
 2 體重の比較...問題構成

- (16) 8人の子供におくわしを分けるのに1人に7つづゝにすると4つたらない、おくわしがいくらあるか。
- (17) 信用組合ではお酒11を55錢で賣つてゐる。751入りの酒だる7つを賣つたらその代金は幾らになるか。
- (18) これは學校の蕙蕙園である。この畠のやうに白菜がうへである。何かぶあるか早く見つけるにはどうすればよいか。
- (19) 上の畠で一かぶが四錢で賣れるとしたら皆で幾らお金がとれるか。
- (20) 文卓堂で1きつ46gの本を2きつと、1きつ86gの本を3きつとを25gあるふるしきでつゝんだ、皆の重さはどれだけか。

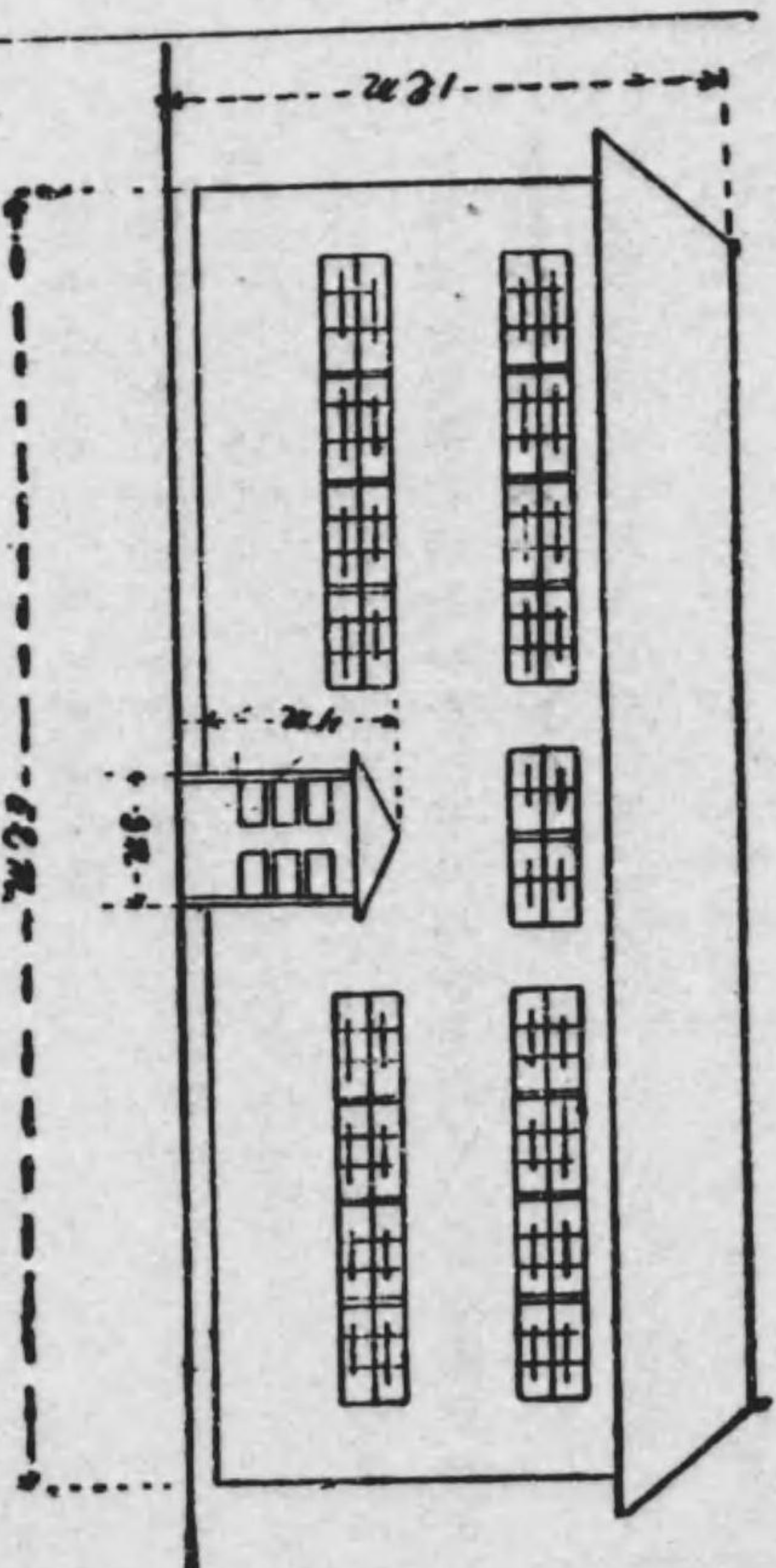


蕙蕙園のまはりを實測すること。

55-61	[除 法 1] [除 法 2] [除 法 3] [應用問題 7]	(1) 學校のにはとりが10月、11月、12月の三ヶ月の間に396こ卵をうんだ。1ヶ月幾らの卵をうんだことになるか。 (2) 大崎神社から忠魂碑まで392mある。之を4分間に歩いた人があつた。1分間に幾メートルあるいたことになるか。 (3) 1つ4錢するりんごは50錢でいくつ買へるか。そしていくらあまるか。 (4) 全校生徒335人を5等分して組をつくと、1組何人となるか。 (5) はくぼくが1箱ある。そのはくぼくだけの目方は500gある。はくぼく1本の目方は5gである。この箱にはくぼく何本はいつておるか。	1 總體の目方をはかることと風袋をはかること、そして正味を求めるところ。 2 自由に實驗 實測して問題を構成すること。
64-73	[除 法 1] [除 法 2] [除 法 3] [除 法 7]	(1) 八幡原から能登川原まで18人分買つて2圓70錢の汽車賃をはらつた。この汽車賃1人分は幾らか。 (2) 2月は28日である。この月に毎日何錢づゝか貯金して1圓40錢ためた生徒がある。1日何程づゝためたか。 (3) 毎三は1週間に25時間の授業がある。ある月に108時間の授業があつた。何週間と何時間の授業があつたか。 (4) 昭和5年本校専科全部で292人である。この生徒で	1 時計の觀察 (イ) 模型によつて長針短針のまわり方を觀察せしめること。

35	[除 法 1] [除 法 2] [除 法 3] [除 法 7]	人づゝの組をつくと、何組出来るか。 (5) 本校本館のの高さは12m、旗竿那山は420mである。旗竿那山のの高さは本館のの高さの何倍か。 (6) 學校から白玉までは1953mある。1分間に63mづゝあるくと、學校を出てから何分で白玉につくか。 (7) 専三の組で1ヶ月に貴方の時間が12時間あつた。そしてその月に半紙を皆で1512枚使つてゐた。1時間に何枚づゝ使つてゐたことになるか。 (8) 去年學校で梨が522箇とれた。之を1山6こで20錢に賣つた。お金は皆でいくらはいつたか。 (9) 長さ11mの白木綿を93cmのたすきに切れば、たすきは幾すぢできて、幾らあまるか。 (10) 組合の倉にある692俵の米を車で長命寺港まで運ぶのに1べんに11俵づつと何べんではこべるか。又終の1べんは何俵つむことになるか。 (11) 本校の長さはげんくわんののはばの何倍か。又にかいまでの高さはげんくわんの高さの何倍か。	(ロ) 任意の時刻を指示すること。 (ハ) ローヤ數字の讀み方。 (=) 時間のはかり方。 2 層による日數の計算。 3 目方、長さ量に關する實測練習。
----	--	---	--

以下諸練習



- 74—81 [複習 3] [應用問題 9]
- (1) 舟屋さんで 69 錢の買物をして、さいふをしらべるとまだ 71 錢残つてゐた。はじめに持つてゐたお金は幾らか。
 - (2) 三郎のうちから學校までは 820m、學校から舊校舎までは 340m である。三郎が學校へ来て、其れから舊校舎まで行くと、皆で 1km よりも幾らよけいあるいたか。
 - (3) 學校から長命寺觀音さんの下までは 2140m である。觀音さんの下から石段を登つて上までは 815m である。學校から觀音さんの上まで登つて、又歸ると、皆でどれだけ歩いたことになるか。

- (4) 學藝會用のまぐは去年の卒業生が 8 圓 30 錢出して、きふしてくれた。この金は卒業生 1 人から 10 錢づつ出したのである。卒業生は何人か。
- (5) 忠一は 2 足で 96cm あるく。140 足では幾らあるけるか。
- (6) 學校から 454m 歸つた所で、おべんたう箱を忘れたことを思ひ出し、98m あともどりした所で、お友達と出合つたお友達は學校から幾メートル歸つて来たか。
- (7) 産業組合にお酒が 2401 あつた。15 日間に賣つた残りをはかつて見たら 301 あつた。11 を 55 錢で賣つておたとすれば、この 15 日間のお酒の賣り上げは幾らになるか。
- (8) 私と弟は姉さんから鉛筆 1 ダースもらひました。之をわけるのに弟に 2 本多くあげやうと思ひます。幾らづつにわけたらよいでせう。
- (9) 63 人居る本校三年生が、1 人に 1 きつ 5 錢する帳面を 4 きつづつ持つてゐる。三年生全部の持つてゐる帳面をお金になほすと幾らになるか。
- (10) 學校の那 4 つの代が 24 錢であると、1 つの代は幾らか。
- (11) 學校から松ヶ崎までは 1098m である。之を一郎は 24 分

<p>で歩いた。1分間に幾メートルづつ歩いたか。</p> <p>(12) 舟屋さんでフクリソの切れ小巾 1lm 買つて、1圓さつ 2枚出したら、35銭つりをくれた。このフクリソ 1lm の 代は幾らか。又 1m の代は幾らか。</p> <p>(13) 今學校に炭が 30 俵ある。その中 26 俵は 9kg づつで、 残りの 10 俵は 15kg づつである。皆で目方は幾らか。</p> <p>(14) 賣店は次の黒物を澤田さんから仕入れた。皆で幾ら拂は ねばならぬか。</p>	<p>1 ダース 12 錢の鉛筆 5 ダース</p> <p>1 さつ 4 錢の紙面 150 さつ</p> <p>1 本 6 錢の大筆 40 本</p>
---	--

尋常小學校國史下巻
五、國史料郷土化の實際

五、國史料郷土化の實際

尋常小學校國史下巻

課	題材	郷土化要項	郷土化及郷土研究との連絡	郷土讀本の連絡	郷土資料室との連絡	注意事項
三三	織田信長	近畿の諸國を平ぐ	<p>永祿十一年</p> <p>(1) 信長長命寺諸坊領の收入を安堵す。 十一月信長は丹羽信秀村井貞勝をして長命寺一山諸坊領知行分の所務を收納せしむ。</p> <p>(2) 元龜元年十一月長命寺への預米を受領せしむ。</p> <p>此の年五月以來信長佐々木の殘黨と所々に對戦し何れも信長軍の戰捷に歸し十一月下旬佐々木義順和を請ふ。</p> <p>(1) 長命寺の「矢錢」と「早船方」の免除 — 天正四年信長觀音寺城に入り佐々木に代りて政令を布き先づ「社寺に矢錢」を課し</p>	<p>本との連絡</p>	<p>郷土資料室との連絡</p>	<p>此年信長義昭を奉じ入京 義昭將軍 (長命寺古文書參照) (同上)</p> <p>矢錢は戰費に宛てらるゝ課税なり。</p>

五、國史料郷土化の實際

たり。長命寺へは參拾貫文の矢錢を課せしが九月十五日其の中三貫文平井氏の臣下分は湖上早船方たるにより免除す。

(2) 林員清長命寺船を免除す。

林員大左衛門員清は信長部下の士にして「湖北の船奉行」なり。長命寺は從來寺船を有し佐々木氏時代より船渡免除せられしが信長近江に政令を布き船奉行も交代したれば從來の如く「寺船免除」を員清に依頼し員清之を許せり。

(3) 沖島の禮米と豊浦—元龜四年

六月十四日信長の臣柴田勝定佐久間盛政は永田刑部少輔及栗見妙觀寺院に宛て沖島「禮米百三十石」を七月中に安土山下豊浦にて納入すべきを命ず。而して其の半額は監を過すべきを記す。

(4) 織田信忠長命寺領土を安堵す。

信長の嫡子信忠(奇妙丸)某年十一月二十九日書を丹羽信秀に與へ長命寺領安堵せ

しめんことを勝家に通ぜしむ。長秀は直に勝家に其の旨を傳ふ。

5) 信長の放鷹と奥島

A 天正六年三月六日鷹を奥島山に放ちて遊獵し長命寺若林房に宿泊すること二夜八日安土に歸城す。

B 天正八年三月十五日信長奥島に放鷹せんとて安土山下より舟にて長命寺に着し善林房に宿し五日滞在して連日鷹を放つ龍愛の「白鷹」雄飛して獲る所多く又北條氏より贈れる「鷹亂取」と名付くるもの他鷹に秀で、雄飛しければ幾回ともなく放ちてり。遠近來集するもの頗る多し。十九日安土に歸城す。其後同月廿五日又奥島に放鷹し四日留連して二十八日歸城せり。

平井氏は早く信長に降りしためなり

(長命寺文書參照)

(長命寺文書參照)

沖島人は早くより信長に従ひ去年七月淺井氏征伐の時も島人早船を出して北近江の沿湖村落を焼かしめたり然るに此の多額の禮米を豊浦に過納すべきは一旦佐々木氏に款を通ぜし故にや(沖島共有文書參照)

豊浦、安土山下湖邊の地にて諸村の貢租を此の地に集む。下豊浦の小事に「大藏」あり。當年倉庫の所在ならん。

信長は常に鷹狩を好み天正六年(安土入城後)は諸國の武將より贈りし其の國特産の鷹を長光寺山、伊庭山、愛知川、奥島山等に放てり。就中「奥島山」の鷹狩は頗る大規模にして前後三回長命寺に宿泊し連日に亘つて遊獵したり。當時遠近より來集して之を觀覽せしと見ゆれば華美なる放鷹たりしが如し。(信長公記)

三四

豊臣
秀吉

(1) 柴田勝家と長命寺領の安堵
柴田勝家は三洲土田城主酒井忠次を介し

一、勝家を減す
一、柴田勝家

て家康に長命寺の事に付断ふ。
忠次即ち家康に傳ふ。文書十一月十七日
とありて年記なし。按ずるに本能寺變後に
於ける勝家と家康の接近を語るものにて又
「長命寺僧が一方秀吉の安堵を承けながら
更に勝家を介して家康にも通ぜし狀」を知
る。

二、近江
賤ヶ岳に
破る

(11) 秀吉長命寺に武運長久の祈禱をなさし
む。
A 天正十一年賤ヶ岳に大勝せし秀吉は近江
を掌中に收めて得意の時期に入る奥島山
上長命寺は祈禱寺なるに由て、武運長久
の祈禱をなさしめ同寺にかゝる「諸課役
及寺舟の舟役」をも免除せり。

(五月廿五日付)

B 此年八月秀吉檢地を本郡に施行す。奉行
等「長命寺山林」を租地となさんとせし

(長命寺文書参照)

(同上)

(同上)

柴田勝家を滅せし
年にて七木槍の勇
士等に感狀を與へ
しは七月なり。そ
の前の六月檢地
奉行に命じて檢地
せしむ。

二、國內
を平げ人
民を安ん
ず

かば「寺僧」之を訴ふ。秀吉檢地奉行増田
長盛伊藤秀盛をして寺有林を免除せしめ
代ふるに「彌々秀吉の爲に祈禱を専修」
すべきことを命ず。
C 長命寺は年始の賀儀として「祈禱の巻數
と青銅百疋」を秀吉に贈るに對し三月七
日朱狀を出して之に答へ使僧に謝せしむ
(1) 秀吉長命寺に山林を安堵す。天正十一
年九月十四日

秀吉の臣増田長盛、淺野長吉は各折紙を
長命寺に遣し寺坊屋敷並に山林に諸課役を
免除されしを通じ若し狼籍の輩あらば訴へ
出づべきを達したり。

(11) 秀吉「愛知郡山崎の地百石」を長命寺
に寄す。天正十六年九月

愛知郡山崎の内百石を長命寺領に寄附是
れ従來の寺領を沒收したる代價にして即ち
莊園制度より知行制度に改革せし地方行政
上の大英斷なり。

此の頃増田右衛門
尉長盛は仁右衛門
尉と稱し淺野長政
は長吉と稱し共に
秀吉の部下なり。
(長命寺文書参照)
山崎 平流郷内百
石

(同上)

三、關白の職を秀次に譲りて太閤と稱せり

(1) 天正十九年四月秀吉は近江内の免除地に對する朱印狀せし時長命寺へも更に寺領宛行狀を與ふ。

(1) 秀次長命寺の寺屋敷及山林等を安堵す長命寺屋敷寺家山林等は天正十一年秀吉が與へし安堵狀の旨を繼續して異なるなきを達せしむ。秀次朱印狀)

三七

徳川家康

一、大阪夏の陣
元和元年五月

(1) 井伊氏の加封と長命寺領の朱印 豊臣氏亡び家康井伊直孝の戦功を賞し近江國坂田郡、淺井郡、伊香郡、愛知郡、神崎郡の五郡内にて五万石の地を與ふ。十一月二日秀忠改めて直孝に朱印狀を與ふ。愛知郡平流郷内百石の地は豊臣秀吉が長命寺領に寄せし地なり。豊臣亡び徳川氏代りて政令を沙汰し愛知郡の地を直孝に與ふ。是に於て長命寺は更に徳川氏の朱印狀を得て寺領安堵を請へり。
元和三年八月廿八日付秀忠平流郷内百石寺領安堵の朱印狀を與ふ。

天正十九年は秀次關白の職を繼ぎし時なり。

二、國內を統べ善き政治を行ふ

寛永十三年十一月九日家光寺領先判の旨に相違なき朱印狀を交付せり。爾後明治維新まで相承して連綿たり。
(1) 慶長七年の檢地 家康は小堀新助、加藤喜左衛門等十餘人を奉行とし近江の地を檢せしむ。檢地奉行名によりて廳げに奉行の部署別を知る事を得。

慶長檢地帳の現存する村と慶長檢地帳は存せざるも寶檢地帳(綱吉延寶八年將軍となる)の奥書によつて慶長度の奉行人を知り得るものとを合して上記す

檢地帳年月	村名	檢地奉行	下役	同
慶長七年九月廿五日	奥鳥村	加藤喜左衛門	福森佐吉	小川市左衛門
同日不詳	王濱(白)	同	同	同
同日不詳	村(白)	同	同	同
同日不詳	村(王白)	同	同	同
延寶七年七月廿九日	丸山村	戸左太夫 内山太郎	戸左太夫	同
同日	白部村	戸左太夫	同	同

三八

德川家光

洋書の輸入を禁ず
寛永七年

(1)本郡第二回の封地 彦根藩井伊氏領寛永十年三月

家光井伊氏に五万石の封土を加ふ内三万石は近江五郡(伊香、蒲生、愛知、坂田、淺井)の地にして、二万石は下野國佐野、武藏國勢多ヶ谷附近の地なり。

近江參万石の内蒲生郡は沖之島、奥之島中之庄の三ヶ村にして六百六十七石三斗七升なり。

(11)第二回の封地 寛永十年西五月廿三日蒲生郡小堀遠江守御代官所の内

白部村の内十六石五斗

岡山村の内 六十石 計二百五十三石
王濱村 十三石 四斗の地

北津 二百六十三 淺井郡と替地され井田村 石五斗四升 伊氏の所領となる

依て初度以來村數四十ヶ村

石高一万七千三百四十四石七斗一升

井伊氏の提封となる

四〇

德川光圀

五代將軍綱吉

大洞辨天堂の建立と領民の壹錢寄附

元祿八年彦根藩主直興は城東大洞山の上に辨天堂を創立し翌九年に至りて成る、當時井伊氏内の領民士農工商僧俗男女老少を問はず一人一錢の寄附金をなさしめ之を費中に投ぜり。之結縁の爲かくなさしめたるならん。領民の數實に二十五万九千五百二十六人に達せり。これ辨財天の寄附なりと雖も一面より見れば當年の戸口調査とも見るを得べし。(本村の庄屋及人數と寄附金額)

元祿八年七月初日 一人前一錢宛

村名 庄屋 人口 男女 寄附金

奥之島村 小兵衛 男三七 鳥目 女三四三 六百九十四錢

沖之島村 太郎右 男九八 同 女六六 四百八錢

丸山村 善兵衛 男一九八 同 女三五五 四百三十九錢

北津田村 八左衛門 男二四 同 女三三六 四百五十六錢

主濱村 小兵衛 男四一 同 女四一 八十七錢

元祿三年湯島に聖堂を建つ

三十二年光圀薨す

井伊伯家記録

人數に比し寄附、鳥目多きは一人一錢の外に餘分の金を出せし人あり。之を「清自錢」と記す。

四七 獲実 港と開	一、寛政四年林子平罪せられ露艦根室に来る	白部村 平兵衛 三〇 男 女 三二 同 三〇八六錢
二、文化三年ロシア人樺太に冠す	(1) 井伊氏奥島山に運河を鑿く。神島奥島間の湖峽は北良山麓の尖風を受け常に舟の覆没する難所なり「井伊直中寛政三年」領地巡視後其普請奉行所藤内に命じ實地に檢せしめ神島沖より内湖に通ずる運河を開鑿せしむ。爾來風波に苦しむ船舶避難の便と内外湖の航通上多大の便を得るに至る之を堀切又は今堀とも云ふ。 (1) 伊能忠敬 文化二年閏八月十一日より本村實測京都より大津着 一行十三人善所勢多より實測八月二十日 一行を二隊に分ちて測量す。 牧村入口より丸山の周を測る(一隊) 牧村より八幡町まで測る(一隊) 八幡着止宿 同二十一日	堀切寫 (彦根藩公益私記) 眞
	文化十二年翌年文政に改む。 文政四年實測圖なる。伊能忠敬始め三郎右衛門後に勘解由と稱す。下總國武射郡の人にして曆學家なり。寛政十二年以後諸國	

南津田より牧村田地石垣までそれより奥島渡り合橋より長命寺まで(一隊) 八幡町より丸山渡り合橋まで(一隊) 長命寺着止宿 同二十二日 長命寺門前より乗船 沖島測量(一隊) 伊崎測量(一隊) 長命寺着止宿 長命寺山上にて眺望圖作製 同二十三日 長命寺出發 中之庄、北津田、奥島、王濱、白王の五ヶ村を測る(一隊) 中之海を測る(一隊) 丸山八郎兵衛方止宿 同二十四日 丸山出發 八幡より中仙道武佐宿を測る(一隊) 長命寺後の湖残より切通し迄夫より王濱	を測量して「宇内與地全圖」を編す是れ我が國測量の嚆矢とす。近江國測量は文化二年八月より琵琶湖の東岸より始め湖西を一周し後更に文化七年冬殘餘の地を實測す。
--	--

五〇	武家 の政治	幕府領地 返上を命 ぜらる	三、櫻山 門外の變																
<p>村際より白部村の背原を測る 八幡町止宿</p> <p>(11) 井伊氏沖島に銃獵を禁ず 井伊氏は其所領なる沖島に銃獵を禁ぜり たとひ同藩の士たりとも同島に來りて銃獵 すれば村民馳せ出で、鐵砲を奪ひ其住所氏 名を聞き届出づべきを命じたり。奪ひ取り し鐵砲は奪ひしものに賞與するを付記せり</p> <p>○井伊氏の滅封 萬延元年三月三日水戸藩の浪士井伊直弼 を要撃す。</p> <p>二年後の文久二年十一月二十日其提封十 万石を減ぜらる。此の時本郡井伊氏の提封 四十ヶ村悉く上地となれり。慶應二年五月 十七日上地の内特に奥島を元の如く所領に 命じ且つ奥島近傍の舊領村を預けられたり</p> <p>○石高領主表</p> <table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <th>宇名</th> <th>石斗</th> <th>石</th> <th>領主</th> </tr> <tr> <td>四山</td> <td>二八五、元、九〇〇</td> <td>六〇、〇〇〇〇</td> <td>井伊掃部頭</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td>三三、三九〇</td> <td>堀田豊前守</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td>一七、九一〇</td> <td>堀田豊前守</td> </tr> </table>				宇名	石斗	石	領主	四山	二八五、元、九〇〇	六〇、〇〇〇〇	井伊掃部頭			三三、三九〇	堀田豊前守			一七、九一〇	堀田豊前守
宇名	石斗	石	領主																
四山	二八五、元、九〇〇	六〇、〇〇〇〇	井伊掃部頭																
		三三、三九〇	堀田豊前守																
		一七、九一〇	堀田豊前守																

(沖島共有文書)

五三	五二	五一
天 皇 上	大 正 皇 上	明 治 皇
昨 の 天 皇 上	今 天 皇 上	天 皇 上
三、國民 の覺悟	一、御即 位、世界 に於ける 重要な地 位を占む	明 治 十 年 の 役 七 廿 七 年 の 七 役
<p>よりよき郷土民と國運の發展</p> <p>グロスタ1公殿下を長命寺に迎へ奉る</p> <p>昭和四年五月十六日</p> <p>昭和三三年十一月十日御即位式に本村疊表、 鯉、葎の献上</p>	<p>本村よりの出征軍人</p>	<p>白部 一三四、四三、一〇〇 } 一六、五〇〇〇 井伊掃部頭</p> <p>沖島の内 一〇、〇〇、〇〇 } 一七、九一〇 堀田豊前守</p> <p>中之庄 一三〇、八七、〇〇〇 井伊掃部頭</p> <p>北津田 二六三、五四、〇〇〇 同</p> <p>奥島 三三、六七、〇〇〇 同</p> <p>沖島村 一五、〇〇、〇〇〇 同</p> <p>王濱 一三、〇〇、〇〇〇 同</p>
<p>我七等 覺悟が</p>	<p>下二奉迎 郷出歴並 氏名軍征 表表人在</p>	<p>十、魂、八、 忠、魂、八、 九、魂、八、 ロ、ス、タ、 ロ、ス、タ、 下、二、奉、 下、二、奉、 二、七、等、 我、七、等、 覺、悟、が</p> <p>戰病死 者官真 並に略 歴に略 出軍征 郷名表 氏名表 表表真</p> <p>例年の戦死者追悼 會と連絡すること</p>

五、國史料郷土化の實際

郷土地理拔萃

(六) 地理科郷土化の實際

我が島村は滋賀縣のほと中央にあり、蒲生郡の北部に位し琵琶湖中の沖ノ島、奥島の二島及び八幡山系の一部より成る。本村の東北は中の湖を隔て、神崎郡栗見村と相接し南方は安土村、金田村、宇津呂村西南は内湖を隔て、岡山村を臨む沖の島は奥島を距る二千米の湖中にあり。

面積 二十八方軒

廣表 東西 五八九〇米
南北 七九〇五米

本村は地勢上圓山、白玉、奥島、北津田、中之庄、長命寺、沖ノ島の七區に分ち役場は大宇北津田にあり。

1、字別人口及世帯數

大字名	本籍人員		現在人員		世帯數
	男	女	男	女	
圓山	二七二	二五三	二一〇	二〇三	七六
白玉	二三六	二二二	一五九	一六八	六八
奥島	二五四	二三四	一七三	一七四	七八
計	七三二	六九九	五四二	五四五	二一二

位置
面積廣表
區分
人口

大字名	北津田	中之庄	長命寺	沖島	計
出生	一八一	一八五	二五九	三三〇	一七一八
死亡	一七八	一七四	二五一	三二四	一六三六
死産	三五九	三五九	五一〇	六五四	三三五四
婚姻	一五〇	一三六	一二九	三四九	一三〇六
離婚	一五八	一三五	一五九	三三八	一三三五
世帯數	三〇八	二七一	二八八	六八七	二六四一
合計	五七	五四	六七	一三九	五三九

2、動 態
A、三年間の人口異動

年度	出生		死亡		死産	婚姻	離婚
	男	女	男	女			
昭和二年	五九	五二	三三	三一	二	二一	〇
同三年	六六	四六	三二	二九	六	三九	一
同四年	四八	五八	三七	三五	六	三八	三

B、各字別七年間の人口戸數の異動

大字	年別						
	昭和三年	昭和四年	昭和五年	大正十四年	大正十三年	大正十二年	大正十一年
圓山	七六戸	七七戸	七七戸	七八戸	七十七戸	七十四戸	七六戸
山	一五九戸	一四五戸	一四四戸	一四八戸	一三八戸	一四二戸	一三八戸

六、地理科郷土化の實際

3、出入寄留者（昭和四年度）

府縣名	出寄留者		計	入寄留者		計
	男	女		男	女	
白王	三六八	三六七	三六九	三三八	三七〇	三六九
奥島	三七八	三五〇	三八〇	三七二	三四八	三七〇
北津田	三五九	二九八	三五六	三五七	三四八	三七〇
中之庄	二八五	二八七	二六五	二九〇	二九〇	二九〇
長命寺	二七六	二七九	二七九	二七五	二七五	二七五
沖島	七〇三	七〇二	七〇四	七〇四	七〇二	七〇二
計	二七〇	二六九	二六六	二六八	二六二	二六六
福井縣	三	二	五	一	一	一
東京府	三八	二九	六七	一	一	一
群馬縣	二	二	四	一	一	一
青森縣	一	一	一	一	一	一
北海道	三	二	五	一	一	一

府縣名	出寄留者	入寄留者	計
岐阜縣	二	一	三
静岡縣	一	一	二
愛知縣	四	一	五
三重縣	一	五	六
京都府	一三七	一	一三八
兵庫縣	一三	六	一九
大阪府	九七	一	九八
奈良縣	一	二	三
鳥取縣	一	一	二
鳥根縣	一	一	二
岡山縣	一	一	二
廣島縣	一	一	二
山口縣	一	一	二
徳島縣	一	一	二

地勢 氣候

香川縣	—	—	—	—
計	三〇三	二二二	五二五	一八
				一八
				三六

奥島は大部分山岳なれども南部に稍廣き平野あり、島中最も高き山を姨綺那山といひ、其の高さ四百五十米なり。本村より年々 天皇陛下に獻上し奉る莫は此の山及び附近の山中より産するものなり。

沖ノ島は大部分山にして平野殆どなし。

本村に川と稱すべきものなれども中の湖より長命寺に至る水道ありて舟の通行に便なり 氣温は本村五ヶ年平均温度、降水量、降雨日数は彦根瀬候所測による。

月別	五ヶ年平均氣温			降水量	降水日數
	最高	最低	平均		
一月	五八	三二	四五・七七		
二月	六〇	三六	四八・三	春	三九七
三月	六三	三六	五一・五	夏	五四二
四月	七五	四七	五八・二八		
五月	七九	五一	六六・七九		
六月	八二	五九	七三・二四		

産 業

1、農 業
北部の山地中には森林豊富にて林産多く南部の湖岸は平野にして農業發達す。

A、農家戸數と耕地平均 (昭和三年度)

月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	計
農家戸數	九	九〇	八六	七五	六八	六四	計 一七五〇
耕地平均	七二	七六	六四	五二	四五	三九	
計	八一・一八	八二・三六	七六・二一	六五・六二	五六・七二	四九・五一	
秋	四八五			冬	三二六		
計	四三			五四			一八五

地 目	反 別		農 家 戸 數		農 家 一 戸 平 均 耕 地 別	
	田	畑	全戸	農家	歩合	田 畑 計
田	三二八	三二二	五四一	三四九	〇・六	六・七反
畑	二四四	五〇八	三九〇	〇・六	六・七反	六・七反
山林	二四四	一七二	三四九	〇・六	六・七反	六・七反
原野	五〇八	四二八	六〇三			
宅地	一七二	四二八	六〇三			
其地	四二八	六〇三				
計	二二二	二二二	二二二			

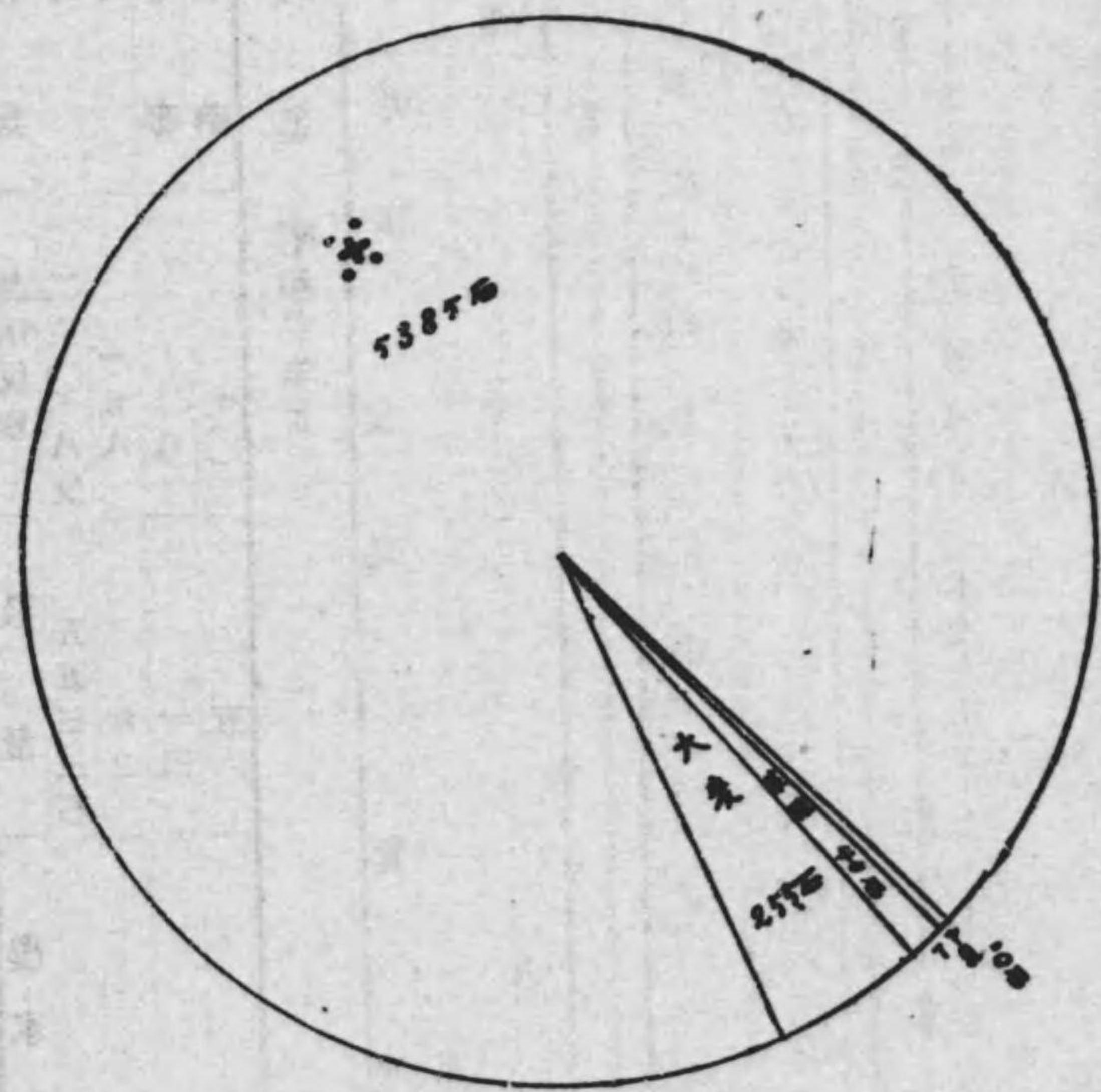
B、農家戸數と所有別耕地別

種別	五反未満	五反以上一町以上	三町以上	五町以上	十町以上	十町以上	計
農家戸數	—	—	—	—	—	—	—
所有別耕地	—	—	—	—	—	—	—

第三編 各科郷土化の實際

C、主要産産物

所有	一二一	八二	三九	七	一	一	一
耕地	一〇八	三四	九八	一	一	一	三四一



D、牧畜 (昭和三年度)

種類	栽培反別	数量	農家一戸平均額
米	二三〇・八反	五五三三石	一五・八五石
小麦	一五八	六二	
小麥	八	一三	
石	七〇	五六	

E、養蠶 (昭和三年度)

牛	馬	豚	養鶏	養蠶	飛鶴戸數一戸當平均羽數	全戸に對する平均
一四	一	二四七	三三二	一一	九〇	九・四
一四	一	二四七	三三二	一一	九〇	四・三

F、養蠶 (昭和三年度)

飼養戸數	掃立枚數	數量	桑加價	價格	飼養農家一戸當平均
一五戸	一二六枚	五八〇貫	二三反	三二八〇圓	二一八・六六圓

G、水産業

A 水産業者	魚獲高	水産製造高	水産養殖	水産業者一戸平均額
一六八	五九一〇六圓	三六六〇圓	二〇圓	三五一・八二

H、主要水産物

種類	数量	價格
鯉	七三〇〇圓	
鮎	三〇四圓	
鮒	一六五〇圓	
鯉	四八四圓	
鮎	八〇〇圓	
鮒	一〇五〇圓	
藻	三〇〇圓	
蝦	二八三圓	
貝類	七二八圓	
其他の魚類	一八五三圓	

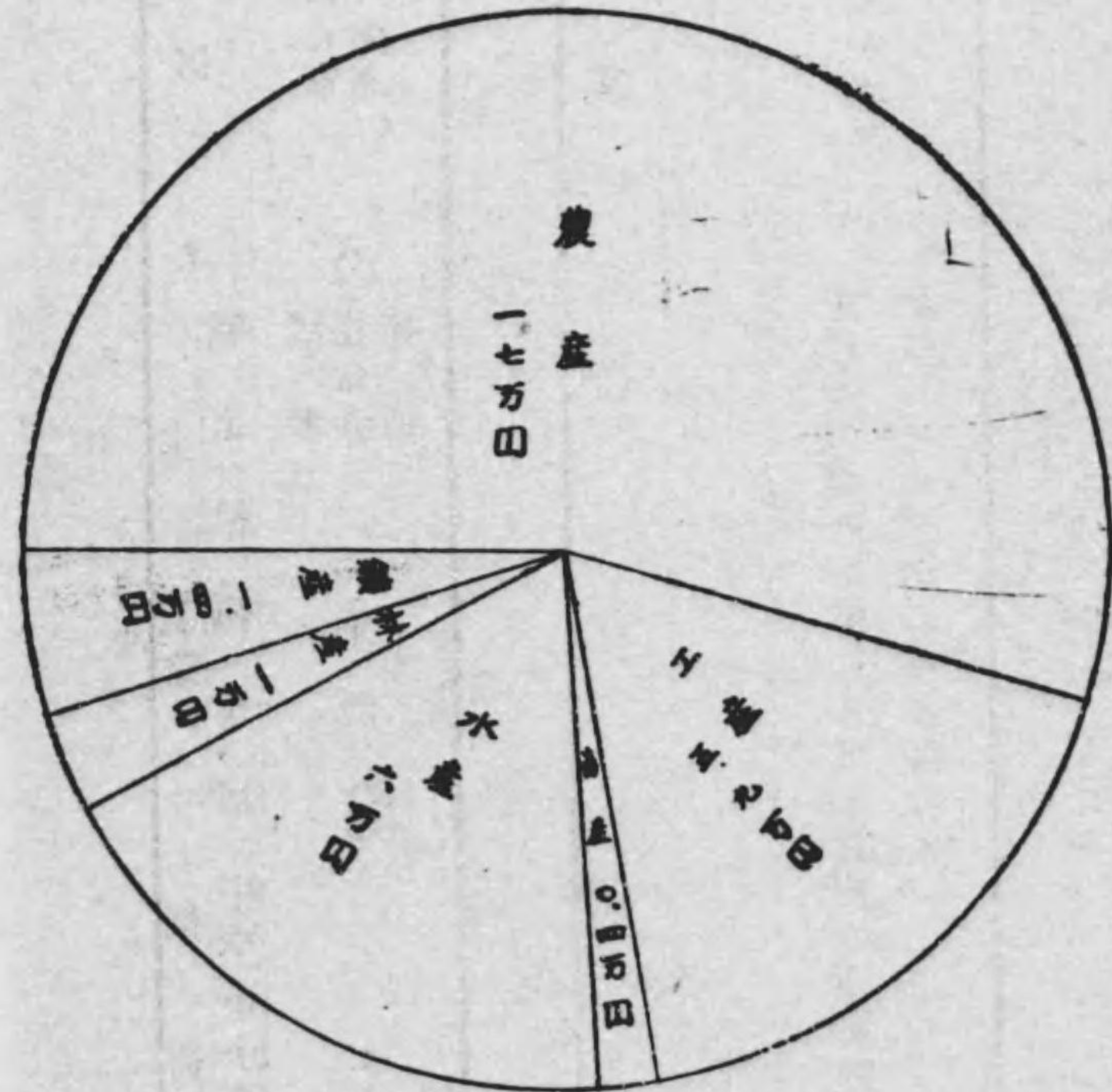
六、地理科郷土化の實際

第三編 各科郷土化の實際

6、生産額 (昭和三年度)

農産	工産	畜産	水産	林産	礦産	計
一八五圓	六七〇圓	四三九圓	六二七六圓	九一六圓	一七二〇圓	三三〇〇圓

生産額表 (昭和四年度)



交通 1、陸上

郵便	電信	ラジオ	道	車	荷	自轉車
日二回	昭和五年 十二月開通	八	縣道 四〇〇米 長命寺 街道	村道 一三三三米	里道 三六八九米	二
集日						七六
三〇六						

2、湖上

小船	港	
四八四	長命寺港	琵琶湖汽船の寄港によりて貨物の運輸沖島及び西江州との連絡に甚だ便なり

社 寺

1、神社

縣社	村社	無格社	計	境内社	神職
一	六	四	一一	一五	三

B、主なる神社

六、地理科郷土化の實際

神社名	社格	祭神	鎮座地	氏子數	國寶
奥津島神社	縣社	大國主命 奥津島姫命	北津田	一三六	一
圓山神社	村指社	瓊々杵尊	圓山	七七	一

2、寺院數

A、		B、主なる寺院		計	住職
天台	淨土	臨濟	曹洞	眞宗	
一二	八	一	一	二	二四
					一五

寺院名	國寶
長命寺	西國三十一番の靈場にして巡拜者多く歴史的にも名高き所なり
伊崎寺	九年八月一日古例により「棹飛び」の行事を以て名高し
	九點 保護建造物

1、景勝地

鳥村十景
(一) 岩崎の岩

2、傳説地

(一) 道祖神社と渡合物

信仰

本村大部分は淨土、天台、眞宗にして極少數金光、天理教の信者あり。眞宗は沖島全島民なり。

淨土	眞宗	天台	淨土兼天理	淨土兼金光	天理	金光	キリスト
二三五戸	一四四	九七	一二	七	一	一	

神道	神道兼天台	天台兼天理	天台兼神道	眞宗兼天台	天理兼淨土	淨土兼天台
二	二	二	二	二	一	三

- (二) 圓山の赤松
- (三) 松ヶ崎
- (四) 伊崎
- (五) 堀切
- (六) 中之庄の黄鯛魚釣
- (七) 姨崎那山
- (八) 圓山の葎
- (九) 沖の島
- (一〇) 渡り合

- (二) 朝日の名號岩
- (三) 惟高親王岩屋
- (四) 長命寺祈願石、夫婦岩

(七) 理科郷土化の實際

尋常小學第五學年理科

課 題 目	郷土 化 要 項	郷土化及郷土研究との連絡	資料室との連絡	郷土との連絡	注意事項
一 花崗岩	花崗岩 石英斑岩	花崗岩の産地沖ノ島に遠足をなし採集をな さしむ。 本村に使用さる、花崗岩 門、土臺石、石垣、鳥居、石碑、手洗 鉢、橋梁、燈籠。 郷土の地質 石英斑岩 荒神山、長命寺山、八幡山、岡山及沖 の島、多景島、白石等皆此の地質系統 に屬す。 石英斑岩は合分は花崗岩と同様であるけ れども組織は著しく違つて種々の色をし た石基といふ無地の部分の中に正長石や	花崗岩 長石 雲母 石英 石英斑 岩	二課 島村 (産業)	觀察せしめるには 造岩礦物の粒が大 きくてその識別の 容易なものを選ぶ 又新面につきなき しむるがよい。

二 土と岩石	土と岩石	石英、雲母などの結晶がぼつ／＼と散在 してゐる。 學校裏の斷崖により岩石風化の状態を觀察 せしむ。 本村の土壤 大字	土壤の 種類標 本	切刈斷崖の直觀的 觀察より岩石風化 の真相を考究せし む。 斯る教材は一朝一 夕に眞の理解は困 難である、平常か ら斯る事項に關す る自然現象に十分 の注意を拂ひ指導 をなす。
三 泉、井	井	岡山―埴土―風乾前(黒色)風乾後(淡 黒灰色)底土―粘土 白王―埴土―風乾前(褐色)風乾後(淡 黒灰色)底土―粘土 奥島―埴質壤土―風乾前(茶褐色)風乾 後(淡褐色)底土―細砂質 北津田―埴土―風乾前(黒色)風乾後 (淡褐色)底土―粘土 中ノ庄―埴土―風乾前(黒色)風乾後 (淡黒灰色)底土―堅粘土 郷土の井は普通の井なり。 郷土の水質及化學上分析の結果 色 濁 無色透明		井水の衛生上の注 意をなす。

七、理科郷土化の實際

七 蠶の發生養	郷土の桑の品種 1、早 桑II節曲、市平 2、中 桑II魯桑 3、晚 桑II十文字、山中高助、細枝 改良鼠返	郷土に於ける桑の害虫 1、枝尺蠖 2、葉卷虫 3、介殼虫 4、桑天牛	郷土に於ける桑の病氣 1、萎縮病 2、赤澁病 3、紫紋羽病 4、根朽病 5、立枯病 6、白澁病	郷土に於ける桑科植物 1、麻 2、いたびかづら 3、くわくさ 4、こうぞ 5、かいちじく	學校に於て飼育をなし觀察せしむ。 郷土に於ける蠶の品種 交雜種	果實につきては桑園にて継続的觀察をなさしむ
一三 蠶					蠶の飼育日誌をつ	
一七 蠶の繭と					けさせる	

飼養戸數 播立 枚數 白繭種 黃繭種	數 計 白繭高 黃繭高	收 計 白繭種 黃繭種	價 計 白繭種 黃繭種	春蠶	夏蠶	秋蠶	計	消毒藥品 フォルマリン、昇汞、クロール石灰等	蠶病 動物寄生 昆虫の(蠶組、蛆組、多化性蠶組) 原生動物(微粒子病) 植物寄生(細菌の寄生、硬化病、細菌の寄生、軟化病) 非生物……… 中外毒 生活要素の不達
				一五	八	一四	一五戸		
三六	一〇九	七〇九	二七〇	一五	一〇	一五	三六枚		
三六	二七〇	七〇九	二七〇	一五	一〇	一五	三六枚		
三六	二七〇	七〇九	二七〇	一五	一〇	一五	三六枚		
三六	二七〇	七〇九	二七〇	一五	一〇	一五	三六枚		

(昭和三年度調)

繭をして糸口を引出しむ
眞綿のつくり方を指導す

八	松	松柏科	郷土に於ける松柏科	1、あかまつ 2、くろまつ 3、からまつ 4、ひまらやししだ 5、ひのき 6、さわら 7、あすなら 8、つが 9、もみ 10、こうやまき	開花期は特に注意をなさしむ
九	竹	竹	郷土に於ける竹林	郷土に於ける一位科 1、かや 2、いぬがや まつかきを利用して手工科にて玩具を製作せしむ。	竹の標島村竹林につき絶へず観察せしむ
			数量 價額		
			竹 林 一、四〇〇束 二、四一〇圓 竹 皮 四〇〇貫 一二〇圓		
			(昭和三年度調)		
			郷土に於ける竹の種類 1、苦竹 2、孟宗竹 3、淡竹 4、黒竹 5、めだけ 6、かん竹 7、やだけ 8、ねざさ 9、すゞだけ		

一〇	雀	小鳥	本校飼育の小鳥	10、みやこざさ 11、なりひらだけ 1、十姉妹 2、かなりや 3、うづら 4、せきせいんこ 5、はと 6、紅雀 7、ぶんちよう	小鳥標 第二十雀の習性は日常児童等をして観察せしめておく
二	燕	候鳥	郷土に居る候鳥	郷土の小鳥 1、めじろ 2、うぐひす 3、せきせい 4、ひばり 5、かはせみ 6、ひわ 7、おくどり	候鳥標 管巢及産卵につきては家庭に於て観察せしむ
			燕は四月に來り十月に歸る		
			第一回 五月頃 産卵 第二回 七月頃 産卵		
			卵は一日に一個づつ産み四、五日間産卵を續け一腹の卵を産み終ると雌は卵を温め始める、そして二週間位で雄と		食物はハエ、蚊、蟻等である

七、理科郷土化の實際

一四	鼠	鼠	鼠の標	第二十課等の學校
一二	柿の木	柿の木	鼠の標	第二十課等の學校
三一	柿の實	柿の實	鼠の標	第二十課等の學校
<p>なり、尙一週間ほど巢の中で盛に餌をたべてから巣だつ。農作物に害をなす昆虫を捕食するので保護鳥となす。</p> <p>郷土に栽培する柿の種類 1、富有 2、花御所 3、蜂屋 4、甘百日</p> <p>病虫害 炭疽病は發芽前にボルドー液を撒布す。みの虫は七月頃袋掛を行ふ。</p> <p>郷土に棲む鼠の種類 1、家ねずみ 2、二十日ねずみ 3、川ねずみ 4、もぐらねずみ 5、白ねずみ</p> <p>驅除法 1、猫によるもの 2、ネコイラズによるもの 3、ねずみおとしによるもの</p> <p>繁殖</p>				
<p>生後四五ヶ月にて子を産む 受胎期間三週間位 一回に五、六匹—十二、三匹位産む 一年に數回子を産む</p>				
<p>栗の害 1、霜被栗 2、嫩中栗 3、今北栗 害虫 1、しぎむし、くりむしが郷土に於ける穀斗科植物 1、くぬぎ 2、かしわ 3、なら 4、しひのき 5、かし</p>				
<p>夏後に於ける日出日入の方角及時刻 晝 十二時三十五分 夜 九時二十五分 夏至に於ける郷土の氣温 ふな、こひ等は温水性のものなれば湖の表層に於ける水温高き部分に棲息す。然し食餌の關係上淺底の場所を好む。 郷土に於けるふなの産額 數 六、五五八貫 價 額 一三、一一六圓 (昭和五年度調)</p>				
一五	栗の木	栗	栗の害	第二十課等の學校
二九	栗の果實	穀斗科	穀斗科	第二十課等の學校
一六	夏	至夏	温度のグラフ	第二十課等の學校
一八	ふな	なこひ科	魚類標本	第二十課等の學校

一五	栗の木	栗	栗の害	第二十課等の學校
二九	栗の果實	穀斗科	穀斗科	第二十課等の學校
一六	夏	至夏	温度のグラフ	第二十課等の學校
一八	ふな	なこひ科	魚類標本	第二十課等の學校
<p>生後四五ヶ月にて子を産む 受胎期間三週間位 一回に五、六匹—十二、三匹位産む 一年に數回子を産む</p>				
<p>栗の害 1、霜被栗 2、嫩中栗 3、今北栗 害虫 1、しぎむし、くりむしが郷土に於ける穀斗科植物 1、くぬぎ 2、かしわ 3、なら 4、しひのき 5、かし</p>				
<p>夏後に於ける日出日入の方角及時刻 晝 十二時三十五分 夜 九時二十五分 夏至に於ける郷土の氣温 ふな、こひ等は温水性のものなれば湖の表層に於ける水温高き部分に棲息す。然し食餌の關係上淺底の場所を好む。 郷土に於けるふなの産額 數 六、五五八貫 價 額 一三、一一六圓 (昭和五年度調)</p>				
一五	栗の木	栗	栗の害	第二十課等の學校
二九	栗の果實	穀斗科	穀斗科	第二十課等の學校
一六	夏	至夏	温度のグラフ	第二十課等の學校
一八	ふな	なこひ科	魚類標本	第二十課等の學校

一九	二〇	二一
ふさも うきぐさ	げんごろ うみづすま	蚊
水生植物	水棲小動物	人體を害する昆虫
郷土に於ける水生植物の種類	郷土に於ける水棲小動物の種類	人體を害する昆虫の種類
1、ふさも 2、きんぎょうも 3、くろも 4、せきしやうも 5、すぎも 6、ひし 7、あをうきぐさ 8、くわい 9、すいれん	1、たがめ 2、あめんぼ 3、まつもむし 4、まるみづむし 5、ひる 6、みぢんこ 7、たいこうち	1、はまだらか 2、くろか 3、やぶか 4、はまだらかはマラリヤ病を傳へる、郷土にはマラリヤ病にかゝるもの多ければ驅除につとむること。 驅除法 ボウフリの居る水溜りへ石油を流す 除虫菊をたく いしがめ すつぽん 郷土に於けるすつぽんの産額 数量 價額 すつぽん 五匹 九〇圓 (昭和五年度調)
水生植物標本	水棲小動物標本	
第二十課 本校の池にある水生植物につき觀察せしむ	第二十七課 ボウフリの飼育せしめ觀察せしむ	

二二	二三	二四	二五	二六
魚	稻	稻の取入	うんか	ずむし
魚類	稻	稻の取入	うんか	ずむし
いしがめ すつぽん 郷土に於けるすつぽんの産額 数量 價額 すつぽん 五匹 九〇圓 (昭和五年度調)	郷土に於ける稻の品種 1、滋賀渡船六號 2、滋賀早神廿一號 3、滋賀中神廿號 4、滋賀關取十一號 5、滋賀壽廿三號 6、滋賀旭廿號 7、滋賀白蟻十七號			郷土に於ける選種法
いしがめ 本	米の品 種標本	稻の害 虫標本		
いしがめ 本	第二課 本校の池に居る魚につき觀察せしむ	第二十七課 鳥村(勢村)の學校の水田につきて研究せしむ		
	ボウフリの飼育日誌をつけさせる			